

論文 / 著書情報  
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT society of architectural design education
巻号 / vol.	No. 7
発行日 / Pub. date	1994,
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。

# Ka

No.7 1994

1993年度設計製図第一(2年生)優秀作品より	2
1993年度設計製図第三(3年生)優秀作品より	6
特別寄稿：未来の構築/D.ポンスティール	16
OB作品紹介：八景島をプロデュースする/ 清家清先生+角永博さん	18
OB作品紹介：街に構える/村田靖夫さん	20
異文化体験：B.ウォーナーさんを訪ねて	22



# 1993年度設計製図第一(2年生)優秀作品より

This year's outstanding 2nd-year studio work: Spring Term

## 木造住宅 Small Wooden House

### 講評

教授 茶谷正洋

建築家は、生活最小限住居にも個性的な表現につとめる。学生自身の将来の自邸案として、趣味を楽しむ空間を内外に求める条件なので、個性化はもっと容易だったはず。

エスキース・チェックの際、本人も気づかないアイデアの芽を読みとって助言したが、たとえば某君の趣味の自動車を何台か広いリビングの土間におくことは逆向きに走ってしまった。

菅菜々子君の作品は、南側のアトリエとパティオでつなぐ宮脇的な配置に好感がもて、本当に建ててみたいと思う。風呂の位置は難がある。エスキース時の複雑な屋根が控えめになったので特選とする。小倉哲君の作品は、木造と緑という和やかな気分をよく表現している。子どもたちははしゃぎ声が聞こえてきそう。大人の趣味の空間がみえないし、ケヤキの大木の下は芝は育たないと思う。冬の日だまりについて再考されたい。増山絵里奈君の作品は、全体がアトリエのような雰囲気で見られる。外観パースは不正確な部分が見えられ、時間不足か。

奇しくも中庭住居的な扱いの3案だが、まだ敷地最大限の利用効果が見えていない。

本学最終年度の評後の感想として、もし設計製図の最後に自由課題があったら住宅ほどおもしろい建築はないのだから、本課題に再挑戦され、比較されたらと希ったり。

### 講評

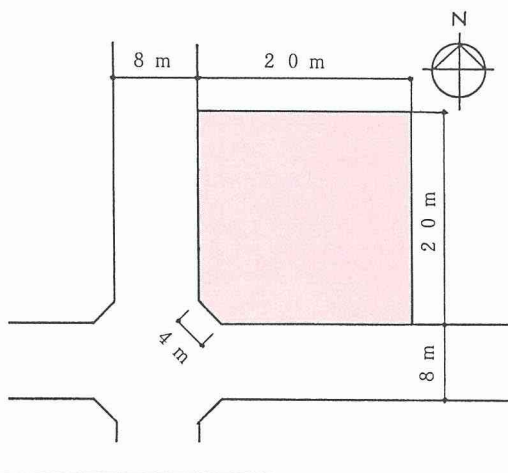
教授 仙田 満

毎年2年前期の最後の課題は、住宅の設計である。建築学科に入って、設計という行為を体験する最初の課題といえる。自分が40歳ぐらいになった状況を想定しながら、その頃の自分がどのような建築空間を求め、どのようなライフスタイルをしているかということ念頭に置いて設計することを要求した。設計の図面の初歩的な約束事はもちろん学ばねば

- 課題：木造小住宅の設計をせよ。
- 製図の目標：
  - ①住宅イメージの把握
  - ②木造住宅の工法的理解
  - ③設計コンセプトの立案
- 規模：延床面積120㎡（建蔽率：60%）
- 家族構成：両親・子供2人（小学生男女）
- 敷地：趣味豊かな40歳前後の芸術家（建築家も含む）の自邸  
地方都市 戸建住宅地（住居地域）

- 提出図面：

設計主旨	400字前後	} A1版1枚におさめる
配置図(植栽計画も行うこと)		
各階 平面図	1:100	
立面図	1:100	
矩計図	1:50	} A1版1枚におさめる
パース 外観・内観	各1面をA1版1枚におさめる	
- \* A1版サイズは正式なものとする



隣地とも同じような区画の住宅地である

ならないが、自分の考えをどのように表現するかも、この課題の重要なテーマであった。

菅菜々子君の提案は、彫刻家のアトリエ付き住宅であったが、大変バランスのよい図面表現、提案がなされている。特に住棟とアトリエ棟を平行した切妻でまとめ、その間の外部空間とアウトドアリビングにした空間構成は、第一作のものとしては出色である。南側のアトリエを平屋にして、住棟への日照の確保をはかっており、環境的な配慮もある。パース表現も優れている。色彩的にも楽しい。

増山絵理奈のアトリエハウスは中庭タイプの住宅であるが、全体の空間の連続性がとてもよく考えられている。アプローチにやや難がある。中庭にガラス屋根を大きくかけているのも、問題点としてあげられるが、内部パース等の図面表現は優れている。

小倉哲君のケヤキを囲むジャングルジムの家も中庭的な構成をもつ家であるが、ほのぼのとした図面表現、そして夢のある提案等、なかなか楽しくておもしろい。屋根の勾配が

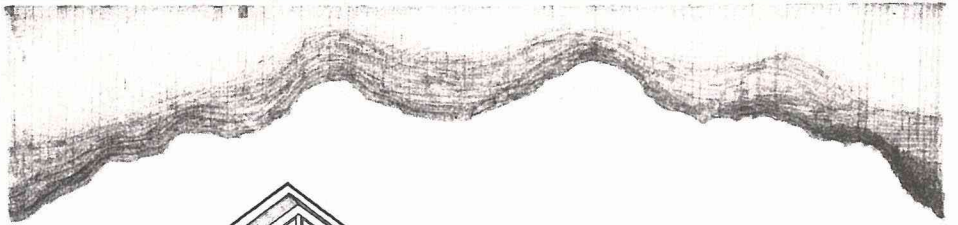
きつすぎるという技術的な問題点も多少あるが、設計を楽しむという気持ちを今後ももち続けてもらいたい。全体に最初の課題としては、取り組みがとてもよかったと思う。

# 2棟の住宅

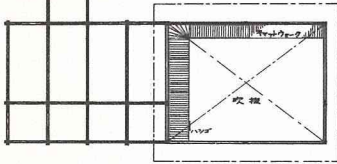
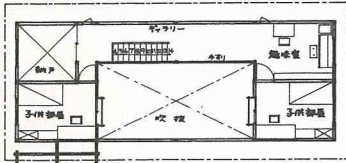
A Pair of Semi-detached Houses

菅 菜々子

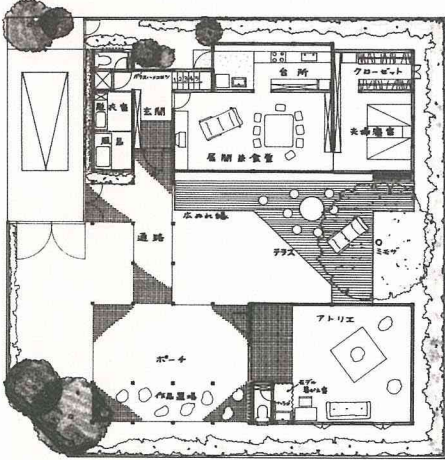
Nanako Suge



perspective



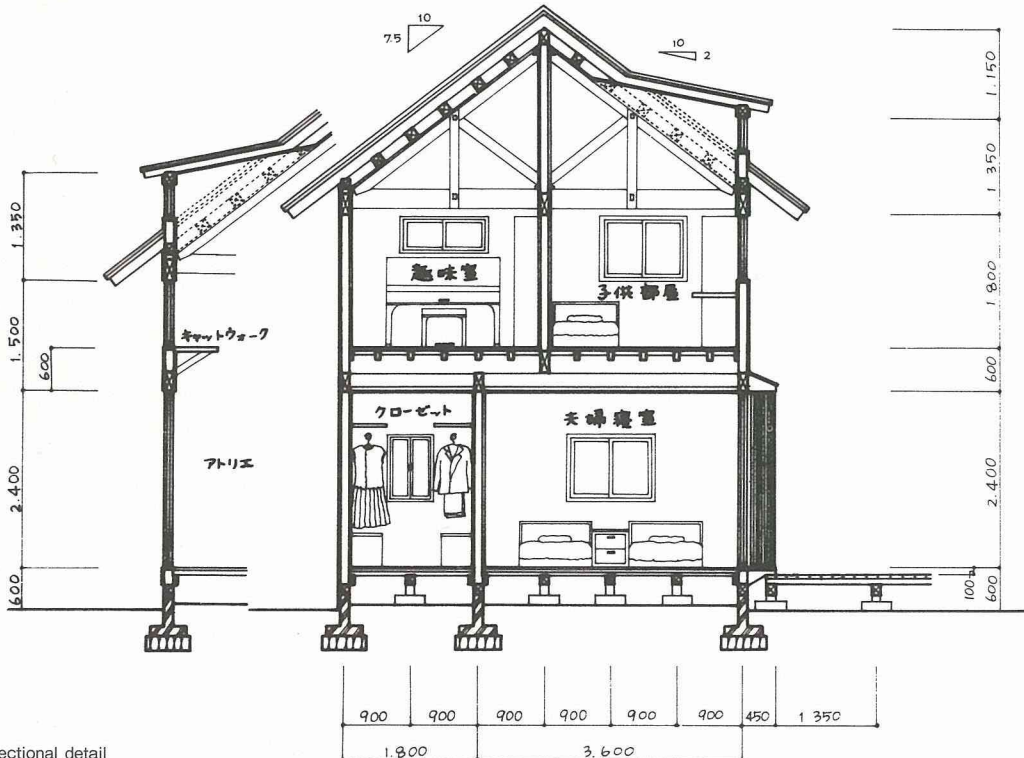
2nd floor



1st floor



section perspective



sectional detail

■この家は、彫刻家のために2棟のうち一方を生活部に、もう一方をアトリエにして、日常生活の雑事と芸術活動の間に、ある程度の距離があくよう設計した。2棟は屋根のない柱梁の通路でつながり、西側から敷地へ入った人はまず2棟をまたぐこの柱梁の門をくぐりつづ右または左へ折れて建物内部へ入るとことになる。柱梁越しには庭中心にランドマークとして配置したミモザの木も見える。■また、2棟は広いテラスでも結ばれ、生活部→通路→アトリエ→テラス→生活部と一周できる回遊性の可能性ももたせてみた。■アトリエは、実際彫刻家のアトリエ・自邸を取材した結果、①作品置場②作品バック用のノッペラボーな壁③上から作品を眺めるためのキャットウォークなどを取り入れた。生活部ではLDを合体させ吹抜を利用し高さ方向にも広がり求めた。吹抜をはさむ子ども部屋からLDを見下ろせる。離れたアトリエが彫刻家本人以外の家族にとっても身近な建物であり続けられるよう努力した。

# ケヤキを囲む ジャングルジム

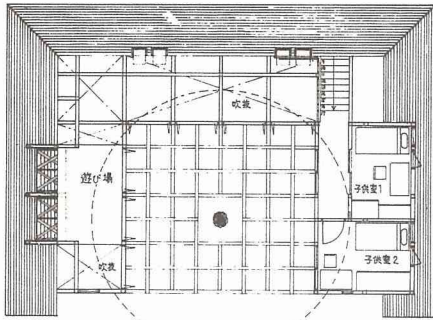
Junglegym Surrounding a KEYAKI

小倉 哲

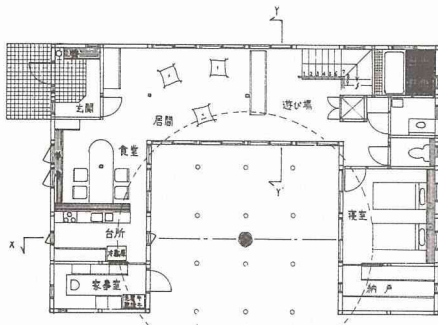
Satoshi Ogura



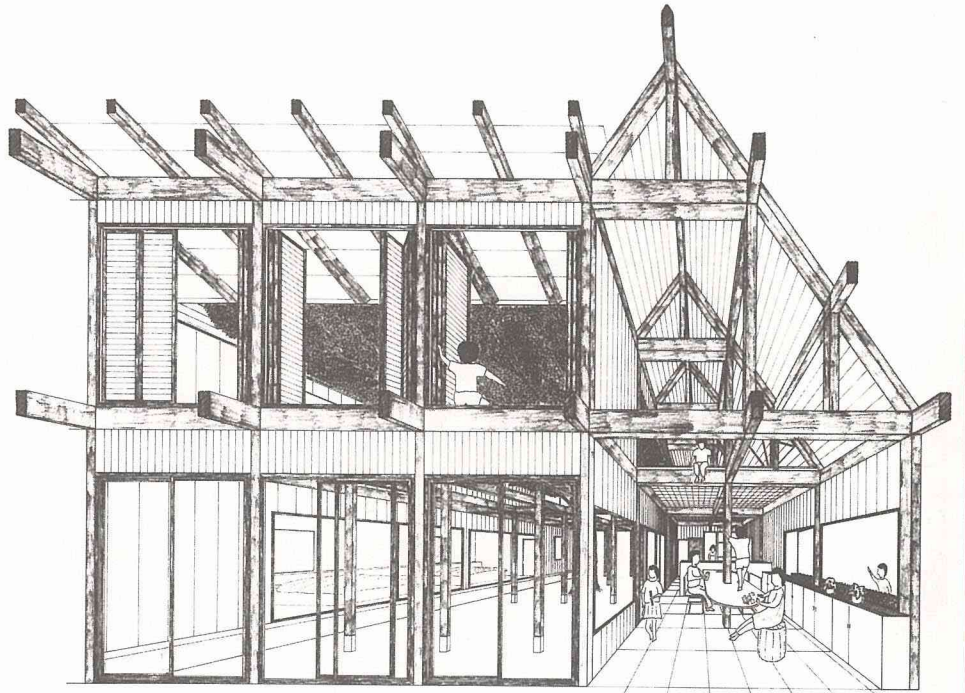
perspective



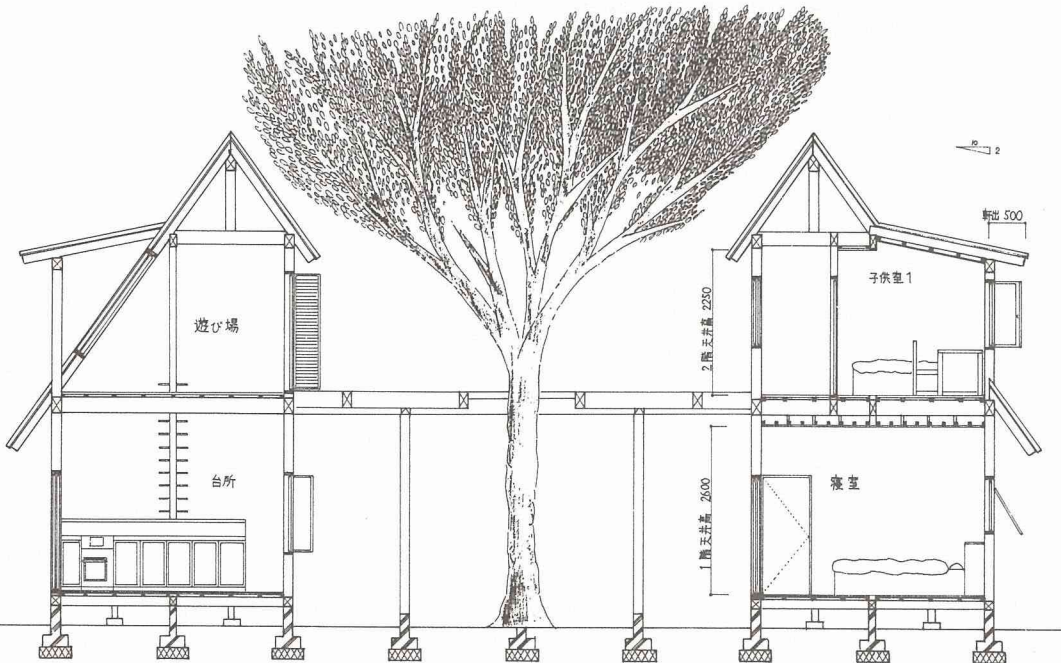
2nd floor



1st floor



sectional perspective



sectional detail

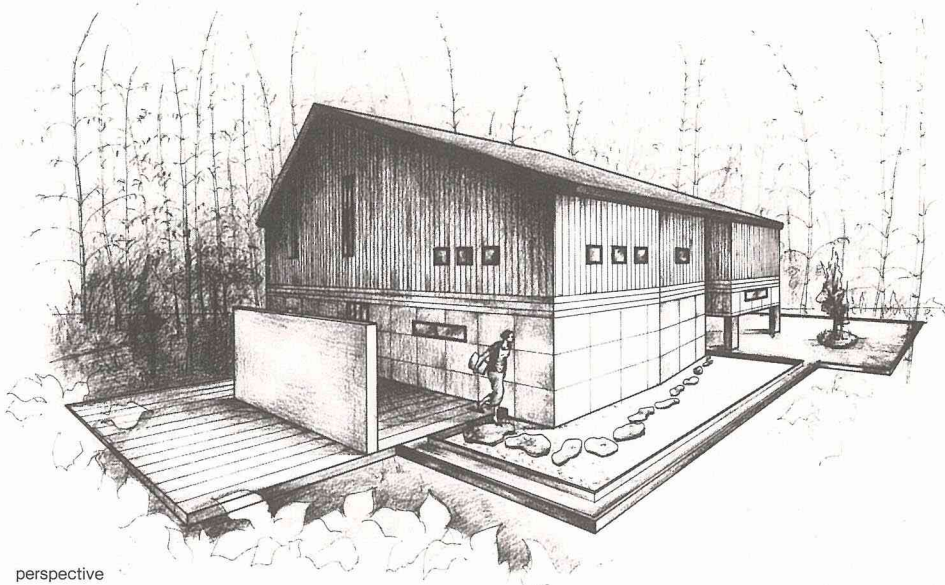
■かつて子どもたちは、“自然”とそこを舞台とする“遊び場”によって育てられてきた。現代の子どもたちはそれらを失い、殺伐とした空間に生きている彼らに“自然”と“遊び場”を取り戻すための象徴として、1本のケヤキとそれを囲むジャングルジムを取り込んだ。

■2階床面の梁・桁が中庭まで伸び、ジャングルジムの形成する。その西側には、室内または外から梯子で、あるいはケヤキを登ってのみ入れる“遊び場”が設けられている。ここは子どもたちの“城”となるが、居間・食堂とも空間的につながっており、“自然児”に戻った子どもたちの溢れ出る笑顔と笑いが家中を包み込む。そして、大人たちもまた人間らしさを取り戻す。

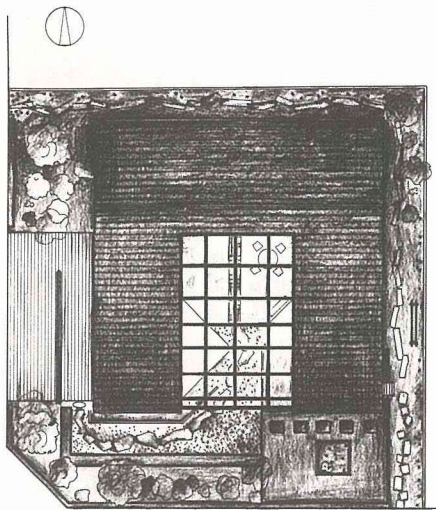
# Atelier House

増山絵理奈

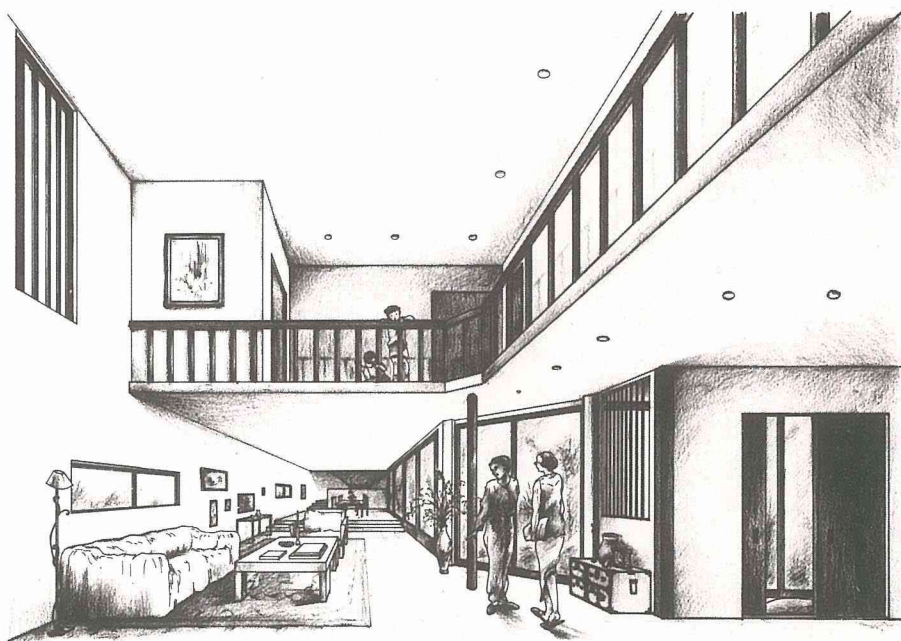
Erina Mashiyama



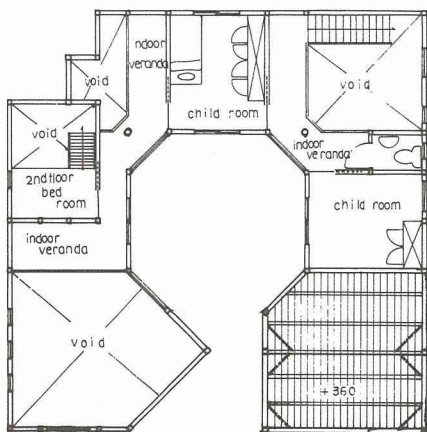
perspective



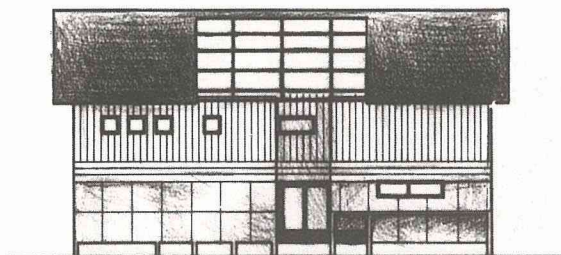
site plan



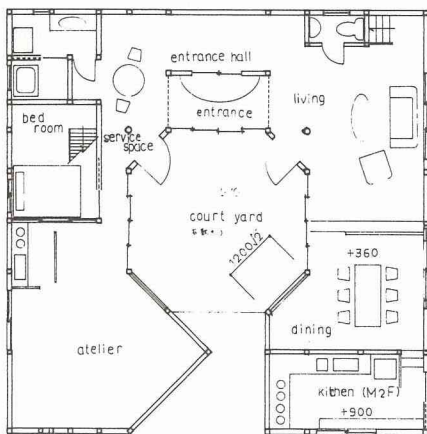
interior perspective



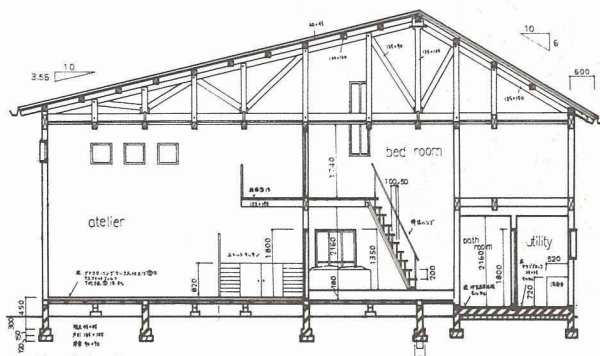
2nd floor



south elevation



1st floor



sectional detail

■この家は建築家と女流画家のための  
 仕事場所を含む生活空間である。仕事  
 場としての独立性を保ちつつも“家庭”  
 からつかず離れずの状態で存在でき  
 るよう、あえて別棟とせず、アトリエ・  
 中庭・生活空間を一つの屋根の下に内  
 包させた。2階の子ども部屋へ通じる  
 室内ベランダをアトリエ内に設け、子  
 どもが母親との関係を失わず、また、  
 作品を高い視点から見下ろすことを可  
 能にした。■この家の「連結」の役割  
 を担う中庭を中心に家を解放し、頻繁  
 にパーティーを催すこともできる。玄  
 関近くの主寝室周辺のみで生活でき  
 るように、簡単な応接場所ともなりうる  
 サービススペースを設け、さらに、この  
 サービススペース・玄関ホール・居間  
 をつなぎギャラリーを開けるようにし  
 た。■閑静な住宅街に馴染むよう外観  
 は抑えめにし、玄関までのアプローチ  
 は視界の変化を楽しめるよう試みた。  
 全体としては、楽しい家を実現でき  
 れば幸いである。

# 1993年度設計製図第三(3年生)優秀作品より

This year's outstanding 3rd-year studio work: Spring Term

## 洗足池に建つ博物館

Museum Adjoining Senzoku Pond

### 講評

非常勤講師 半澤重信

わが国の博物館・美術館の歴史をそれら施設のもつべき機能、およびその後のあり方について、国内外の実例をスライドを併用して講じ、課題に対して各々自由に館の目的を設定させ、そのコンセプトを建築計画に具体化させた。

建設想定地は、東西約180m×南北約320mの大田区洗足池畔。大半が一種住専の住宅地で、社寺、地域図書館が散在する。課題全般を主導された仙田教授と協議し、延床面積を4,000㎡と想定した。博物館建築の建築計画上、これ以下の規模には、実際に特殊な配慮が必要であり、またこの程度のものに最も緻密性が要求されるからである。

課題により、ほとんどの学生が改めてこの地を訪ねた。そして洗足池の地域における存在を改めて認識し、いっそうの現実感をもって環境と施設の基本的なあり方を論じている。大半が自ら定めた平面計画の基本に、施設を地域の水・光・空間を原点として捉え、人びとの憩い・憶いの場に据えた。またこの環境ゆえに、かつ建物規模が限定されていることから、ここを訪れる人びとを新たに構成した外部空間に導き、彼らの思惟の拡大をそこに求めている。これらは課題の主旨からも高く評価できる。

しかし、これらの内容に比べて、総じて造形に対する追及、図面の表現方法に数段の努力が望まれる。前者とのバランスも考えたい。さらに本人自身、本来的にもっているのでは

半澤重信 Shigenobu Hanzawa

1930年 東京都生まれ。半澤重信研究室代表、千葉工業大学講師、日本建築学会建築博物館設立調査委員会委員。

1956年 東京工業大学建築学科大学院修了。文化庁文化財保護部主任文化財調査官(91.3まで)

主な作品：国立近代美術館工芸館、国立劇場・国立能楽堂(基本計画・監修)、The House of Japan(N.Y.)、中尊寺金色堂等文化財保存・収蔵施設  
主な著作：『博物館建築—博物館・美術館・資料館の空間計画』、『歴史民俗資料館』

●課題：洗足池周辺に自由に敷地を選定し、博物館を計画する。博物館の内容についても自由に提案してよい。構造も自由とし、規模は約4,000㎡とする。(敷地選定範囲については別紙参照)

●提出物：

①配置図(植栽計画も行うこと) S=1:500

②平面図

立面図 S=1:200

断面図

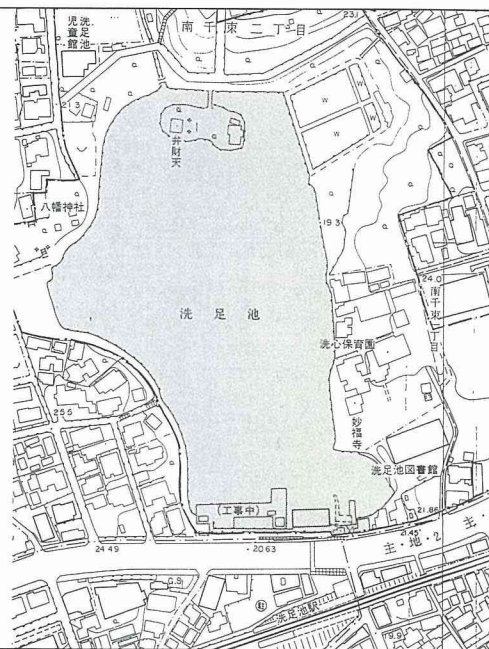
③平面詳細図(展示室の部分) S=1:50

④パース(内観パース)

⑤説明(800字以内を図面の中に入れる)

⑥模型

\*用紙サイズはA1版とする。(縦横自由であるが、どちらかに統一すること)



ろう優れた造形力が、潜在的自信だけに留まって、施設に対する機能、あり方等のコンセプトの追及が自己のそれに追いついていない作品も散見された。不勉強、怠慢である。

建物の造形=意匠も重要な機能である。それは時にその平面、その他の計画に優先することすらある。このことも、銘記しておいてほしい。全員今後一段と自己の努力の目標と内容を、その時間配分と併せて考慮し、努力されることを望みたい。

### 講評

教授 仙田 満

洗足池湖畔の博物館という課題は、数年前にも私がだした課題である。環境のさまざまな可能性や情報を整理し、建築的な構想にまとめることを要求した課題である。私としては、この場所に対して、地域の文化を読みとった上で、内容的にもユニークな博物館の提案を期待したのだが、多くは美術館的な提案であった。内容的におもしろかったものには、文楽博物館、水中貯蔵庫博物館などがあったが、内容と建築的なデザインとの整合性という点ではもう一歩というところであった。

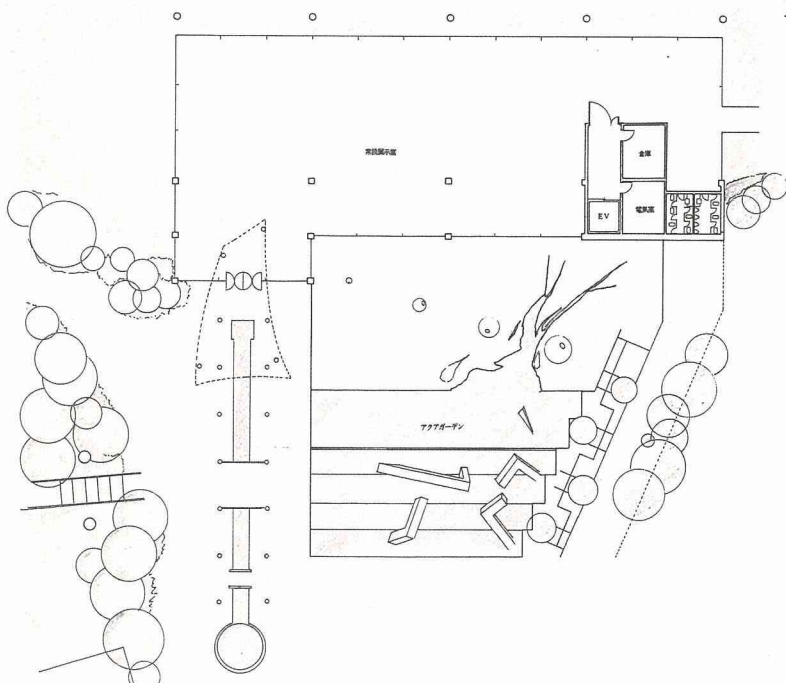
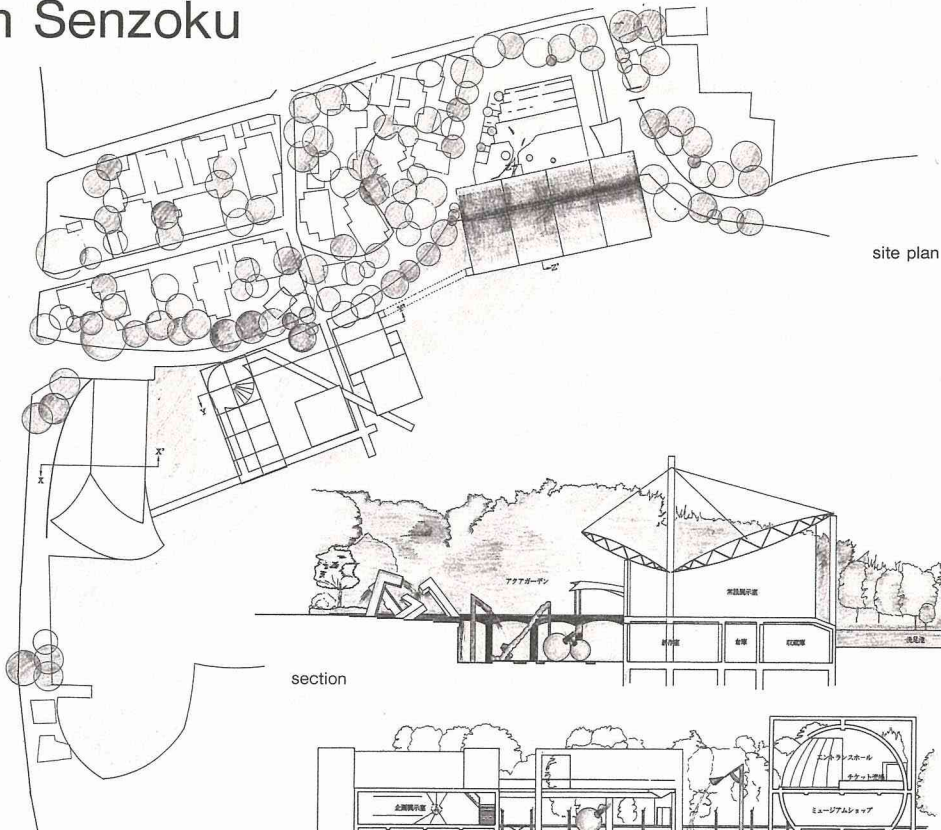
梅野圭介君の「モダンアートミュージアム」

は、池の上を美術館の空間としたもので、なかなか大胆な提案であった。美術的なモチーフを十分に入れ、建物もアートとして表現しようとした意欲はかえる。本田哲也君の「洗足池応用美術館」は水を情報的にも、テーマ的にも、環境的にも、建築的にも導入しようとしている。しかし若干観念的なところに落ちいつているともいえる。図面表現については、空間はおもしろい構成を見せているが、全体的な応用美術館というコンセプト、水の処理などつめきれていないところも多い。山口祐一郎君の「アートミュージアム」は全体をそつなくまとめている。環境的な位置関係、池の水の取り込み等、平凡ではあるが好ましい構成を提案している。渡辺拓君の美術館は宗教的な感じを抱かせる作品である。池に浮かぶハーバー的な列柱がよくも悪くもこの作品の主張で、一つの結界をつくっている。図面表現も丁寧である。太田啓介君の美術館の提案はとても新鮮である。建物のすき間、建物の屋根の上下等、境がとても不明確で、その中に人びとが空間を楽しみながら、回遊するような環境をつくっていると思われる。

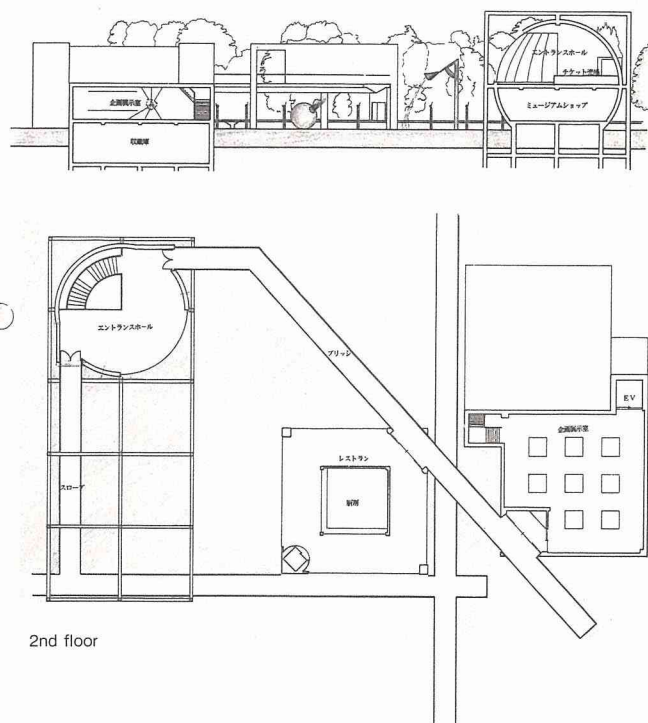
全体としては前回とは異なる新しい提案があり、好ましい学生諸君の取り組みであった。

# Modern Art Museum Senzoku

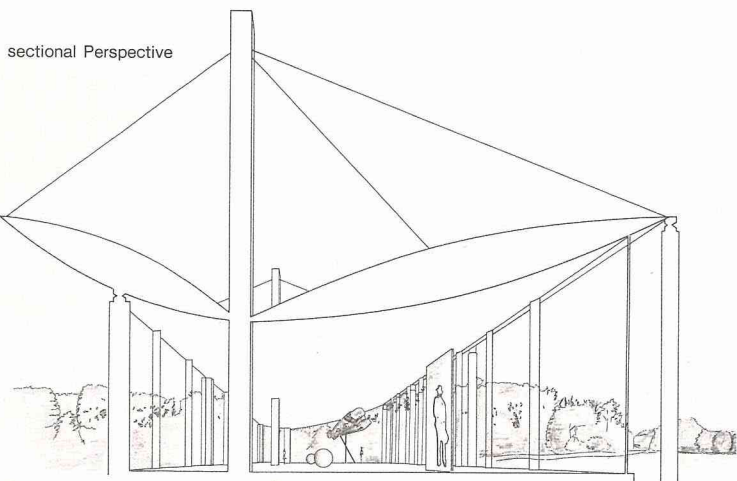
梅野圭介  
Keisuke Umeno



1st floor



2nd floor



sectional Perspective

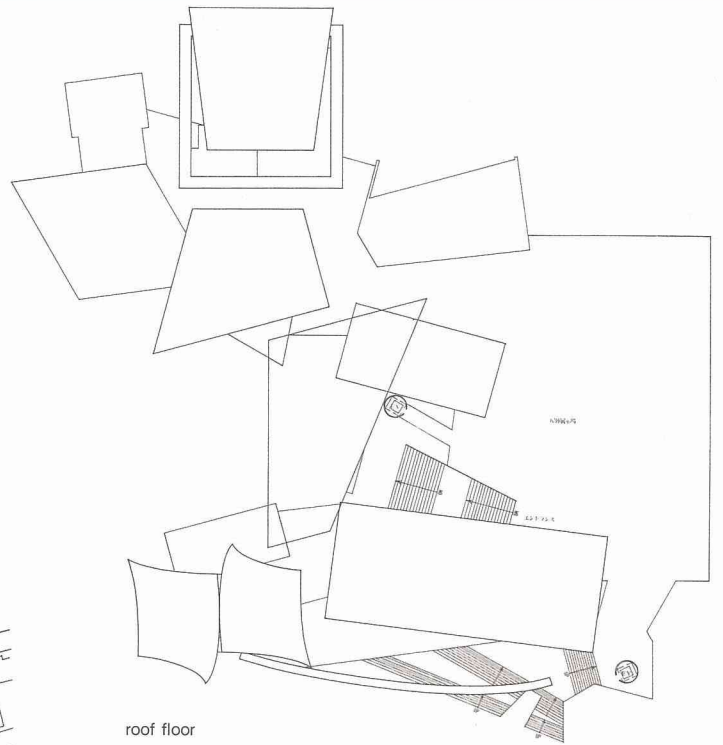
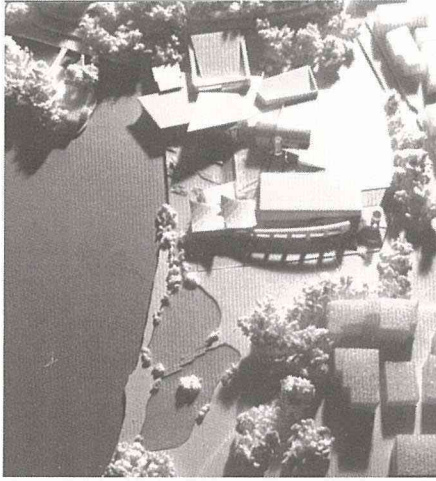
■都市が緻密になるにつれ、自然との関係をどうするのが、問題となる。その解答の一つとして、都市の中の水辺空間としての洗足池を現代アートにより人びとを結び付け、より親しみのある空間へ移行させる。■洗足池にあるものは、水と光と広がりのある空間である。それをうまく取り入れることがこの美術館のテーマである。全体の構成は、回遊性をもたせるために、池に沿って3つのブロックを配置した。■まず、中原街道に面し、都市の喧騒を遮る曲面のファサードをくぐる。そこには、突然広がる洗足池の景観とエントランスの柱と水のオブジェが高揚

感をもたらす。その建物はAV講義室と事務所を内包し、人びとのアートの交流の玄関となる。■つぎに、空間と作品との新しい関係を求める実験的作品を創りだす工房として、幾何学的構造物を水面から浮かべる。そして最後に屋根を吊るすことにより可能になったガラスの全面ファサードにより、洗足池の景観を作品と一体化して見せる。■3つのブロックを栈橋によって結び、栈橋には、昼は下から水をあて、夜には光を照らしだすことによって水面から浮かび上がらせる。■以上の数々の試みが平面的で退屈な都市計画に、ドラマ性や躍動を与えるであろう。

# 美術館

Art Museum

太田啓介  
Keisuke Oota



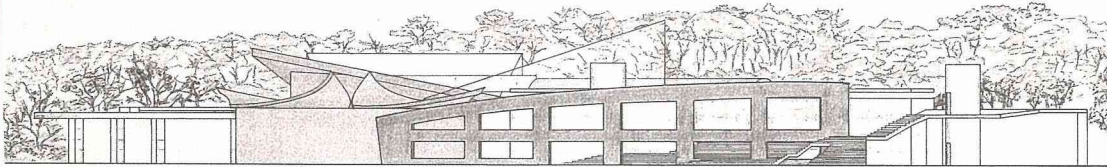
roof floor



site plan



1st floor



south elevation

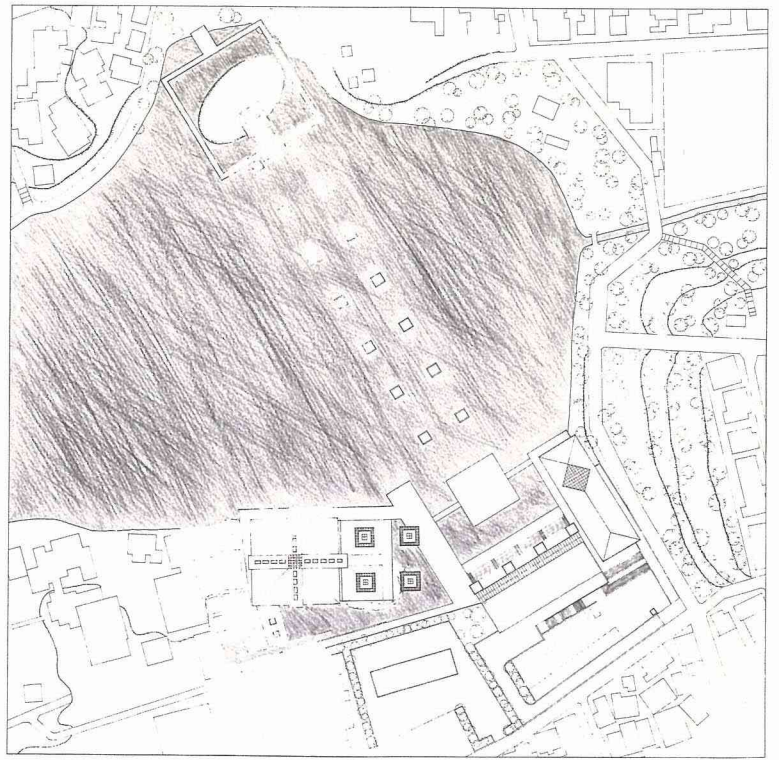
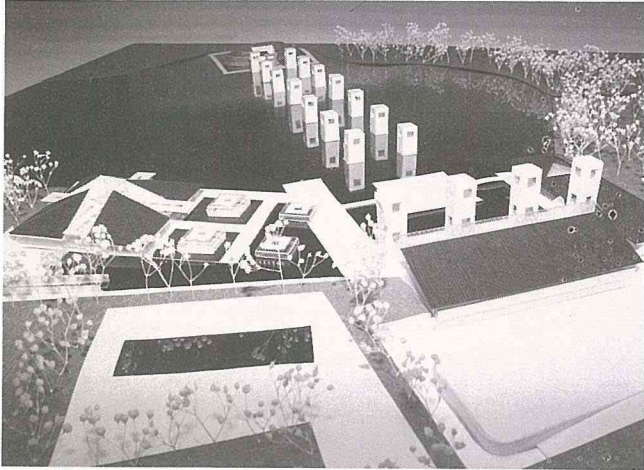
- 自然・文化、人間を見つめ直す。都市の中で忘れた何かを個人個人がそれぞれ見つける空間。そんな空間の一角。
- 誰でも気軽に入れる。空間を楽しみ、くつろぐ。ジャンルは問わない。一時にいくつもの企画。
- 洗足池の風景、人工池の遊び場。湾曲した壁。反り返る屋根。ガラス。円筒。コンクリート。階段。池の広さ。環境。地面と水面。
- それぞれの形。それぞれの建築。
- アトリウム。余白。くつろぎ。語り合い。
- 定位。

# 洗足池応用芸術館

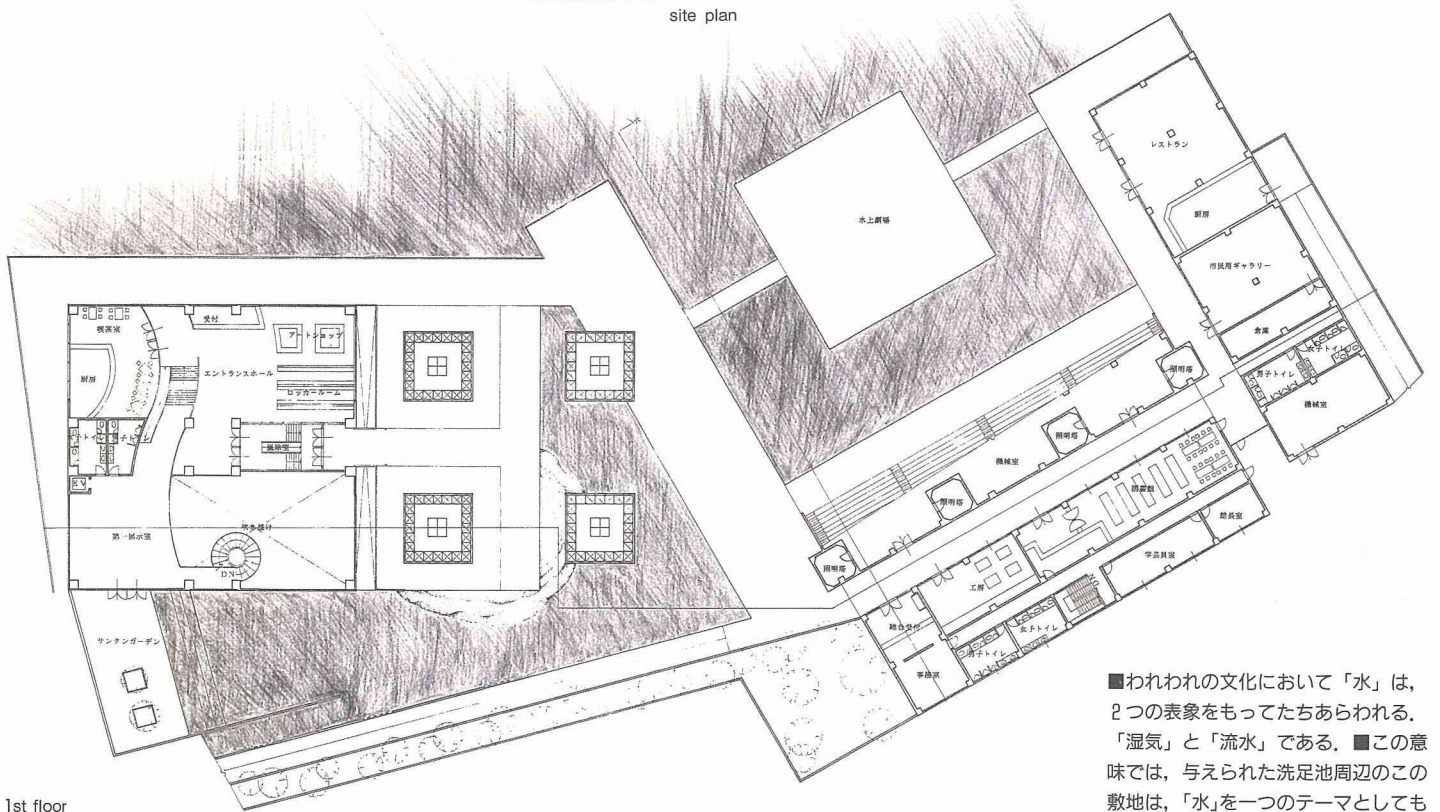
Senzoku-Ike Applied Museum of Art

本田哲也

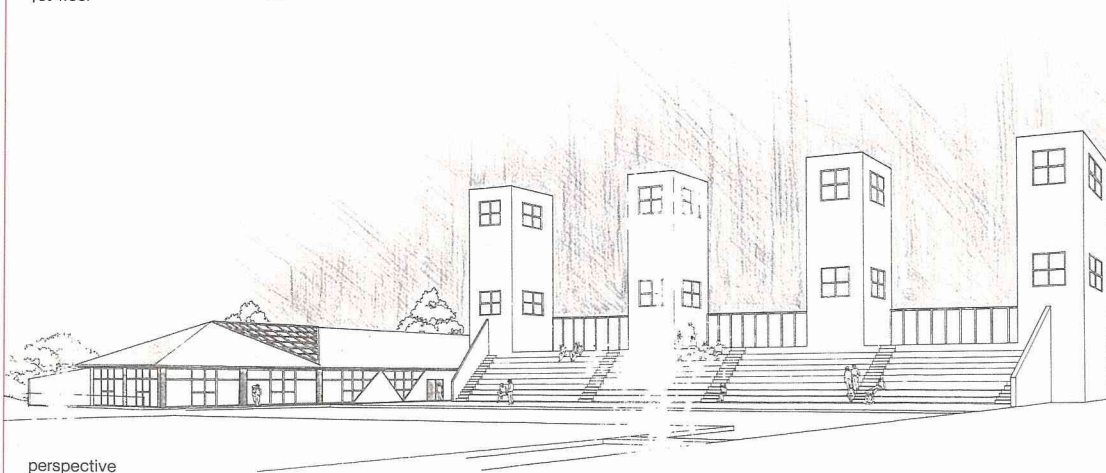
Tetsuya Honda



site plan



1st floor



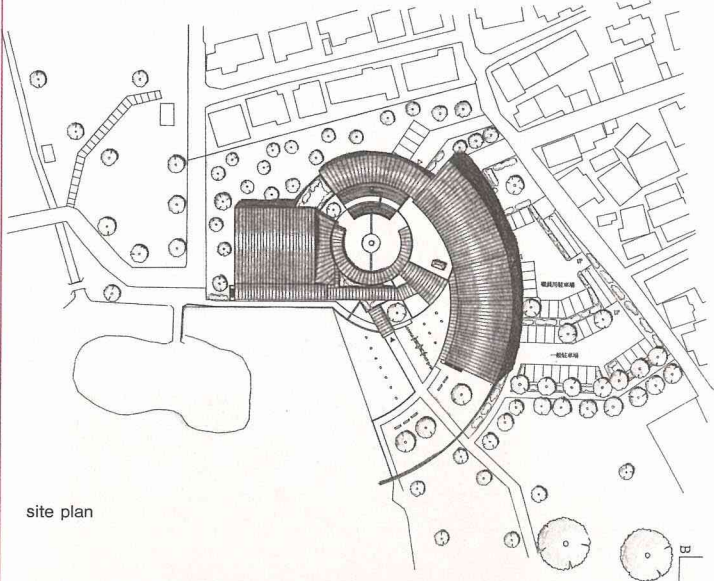
perspective

■われわれの文化において「水」は、2つの表象をもってたちあられる。「湿気」と「流水」である。■この意味では、与えられた洗足池周辺のこの敷地は、「水」を一つのテーマとしてもちながら、「流水」のイメージとして欠落させている。■この計画ではこの補完として新たに設けている。人は水源より流れるせせらぎに導かれ、建物に入り込み、眼前に広がる池を、滝を、地下水脈を発見する。■洗足周辺の緑は、すでに都市に包囲され自然から遊離してしまっている、手を加えずこのままの姿を残す消極的な保護ではなく、積極的な作りかえにより、新たな価値を付加することができる。人は、「水」を文化の文脈の上で感じ、自然をイメージすることができる。せせらぎは、夏の暑さには涼しげな潤いを、冬の寒さには冴え冴えとした輝きをこの建物に添えてくれるだろう。

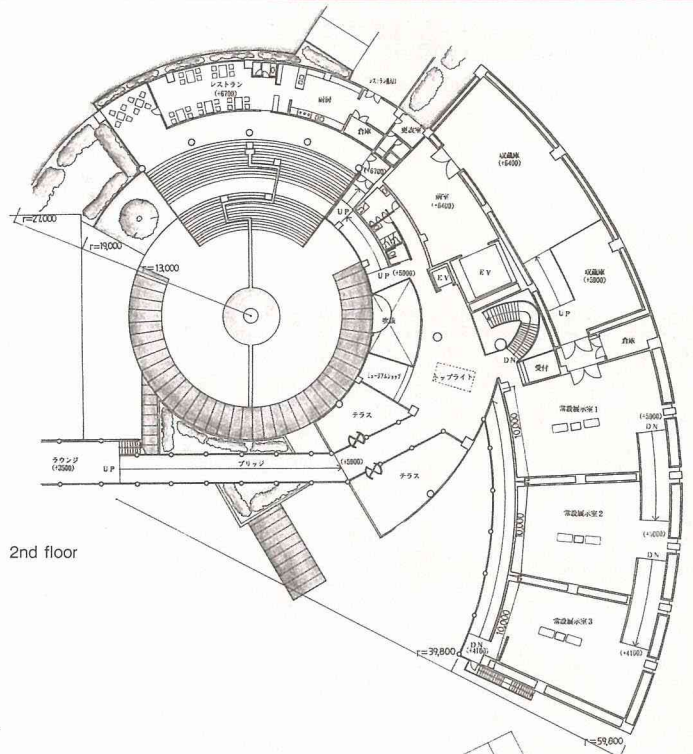
# Senzoku Art Museum

山口祐一郎

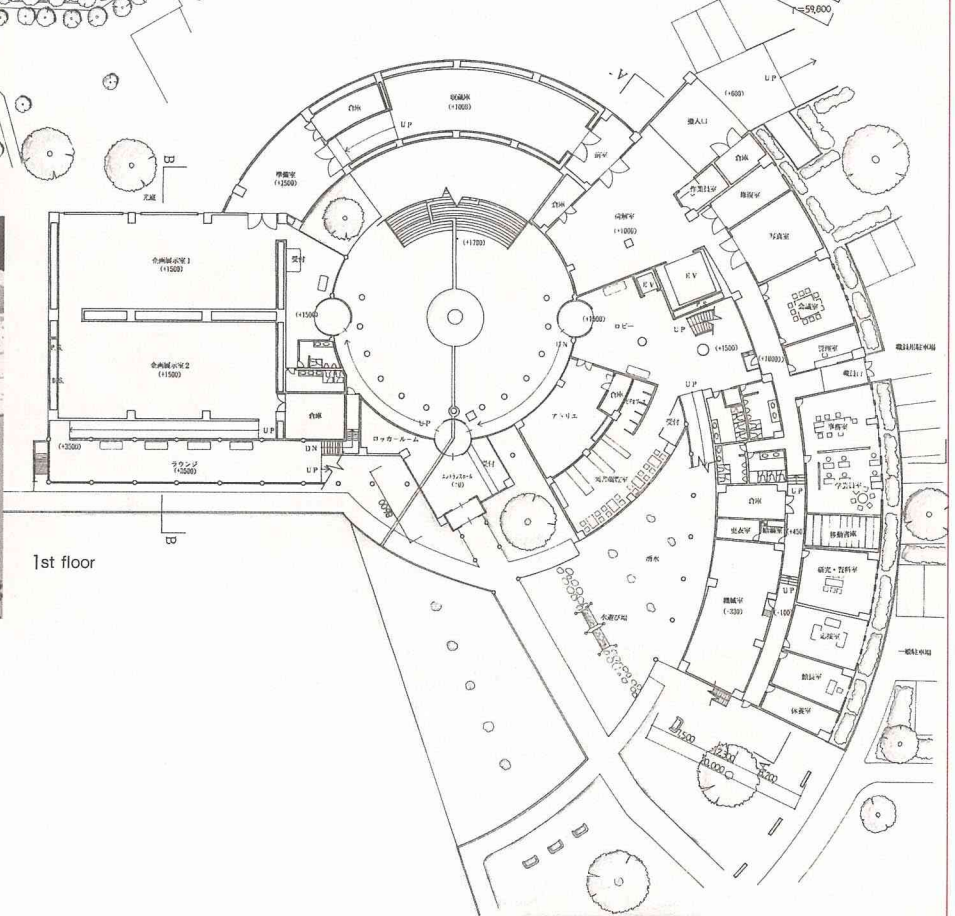
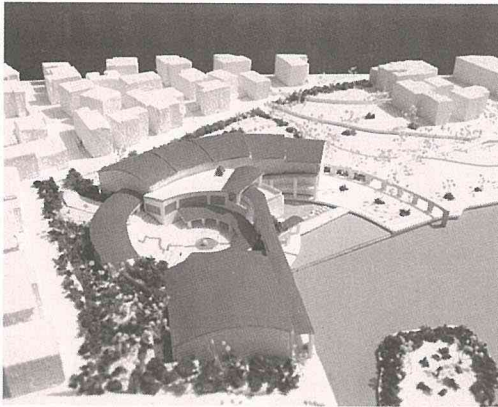
Yuuichirou Yamaguchi



site plan

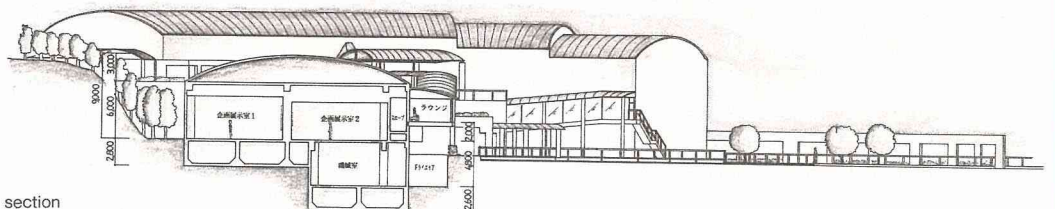
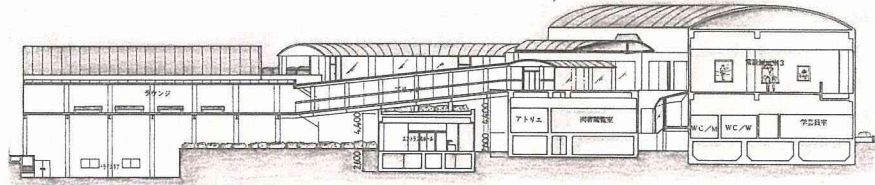


2nd floor



1st floor

■訪れる人びとは、すりばち状の広場を中心として展示空間を上り下りの斜路で8の字に描きつつ、この広場へと回帰する。斜路による上り下りは、芸術に接する人びとの緊張を保持させる。そしてこの広場は、この美術館の中心であり、自然と芸術の外舞台として親しく市民に活用される公共空間である。■この近代絵画を収める美術館は洗足池のほとりに建つ。洗足池は住宅街の中に位置し、現在は子どもの遊び場や市民の散策の場である。この美術館がこのような周辺地域のコミュニティの一角を形成し、また訪れる人びとがより水に親しみを感じ、さらには芸術への関心を深められるような空間を意図した。■外観は、水辺の風景に映えるよう、形態は池からの勾配を吸収することによって周囲の自然の緑と融和する。■ここで人びとはたんと水が奏でるリズムに耳を傾けながら芸術と対話する。



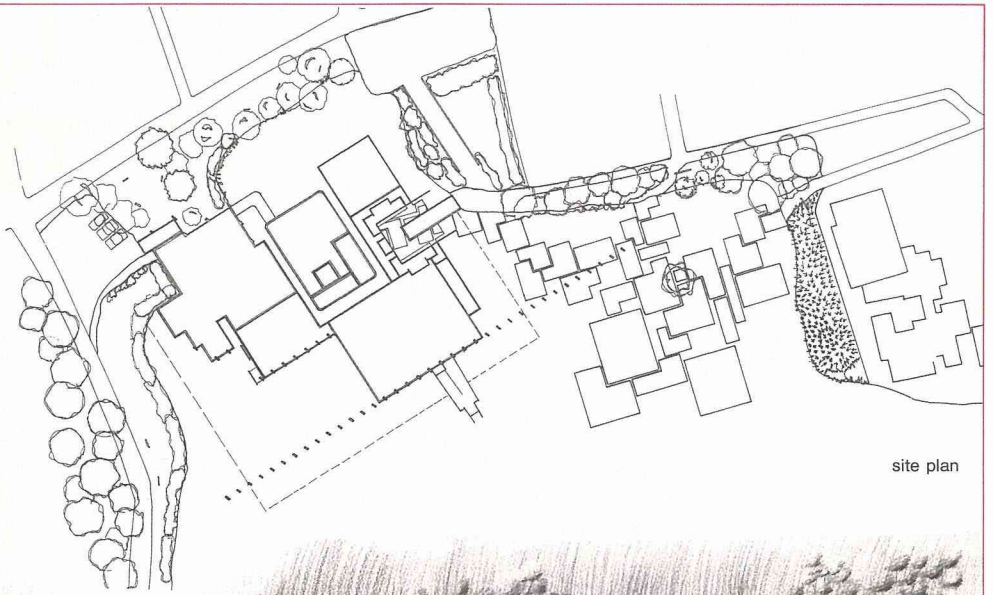
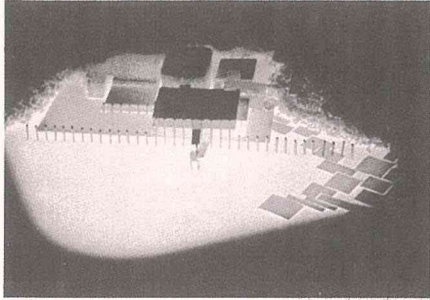
section

# 洗足池に立つ美術館

Art Museum Adjoining Senzoku Pond

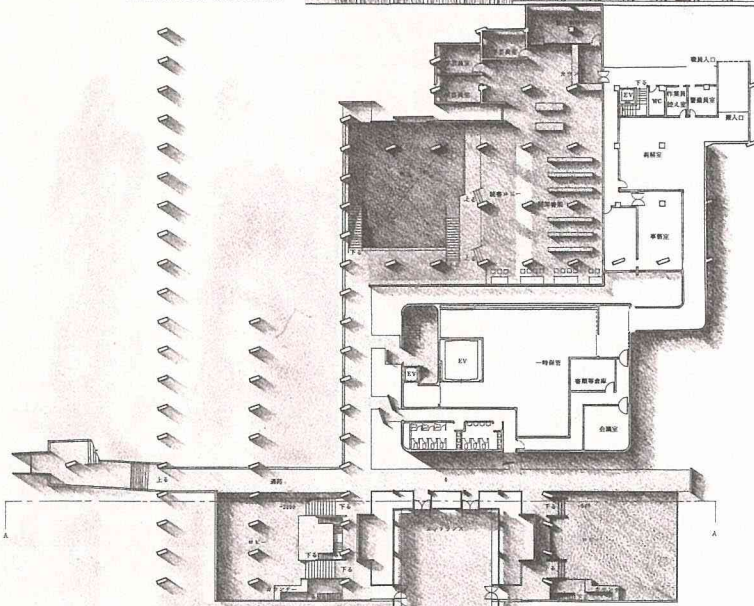
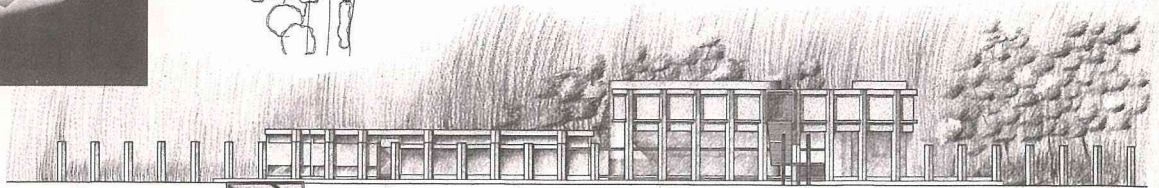
渡辺 拓

Taku Watanabe

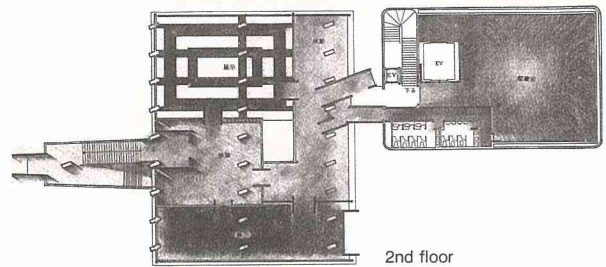


site plan

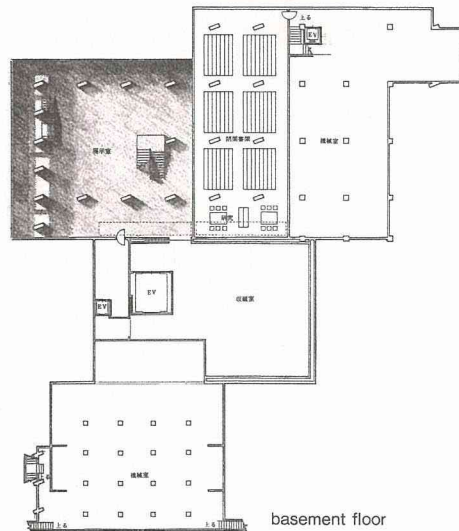
southwest elevation



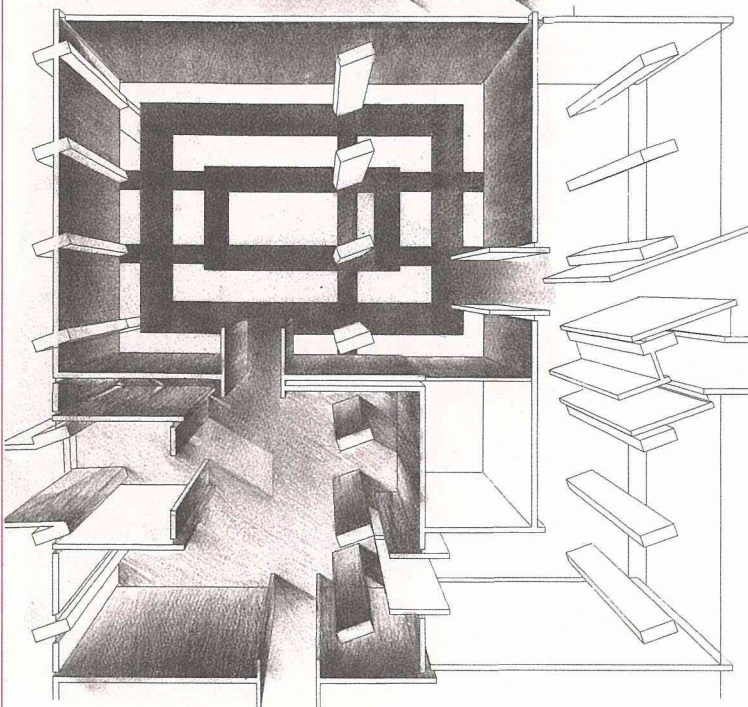
1st floor



2nd floor



basement floor



section

■「博物館とは、愛情の分散を強いるようにつくられた近代の不幸なのではなからうか。」\*

これは亀井勝一郎の著した言葉である。私はこの課題でこの言葉に対する解釈を示すことにした。■私たちは与えられ過ぎている。自分の手足で求め、発見する喜びを失っている。考える作業さえも情報によって奪われる。与えられる物の比較と選択に時が費やされ、最後には自分の意志も見失う。“近代の不幸”を、私はこのように考えた。

■この建築は自ら語ることはない。意識次第で感動や発見は飛び石伝いにアプローチするだけで得られるのだから。建築はそれを自分のものにするための手助けになればよい。輝く水面は天井に模様を作り、足元からの光は空間を浮遊させる。この美術館の中には多くのものが発見されるために隠されている。建築はどこまでも未完成で、来館者の感受性によって完成されることを望んでいる。\*「大和古寺風物誌」斑鳩宮より

# 1993年度設計製図第三(3年生)優秀作品より

This year's outstanding 3rd-year studio work: Spring Term

## 大空間建築 Huge Space

### 講評

非常勤講師 高田典夫

建物の計画をする際には、周辺環境との関係  
を考慮しながら計画することは基本的なこと  
であると思う。特に、既存市街地の環境から  
かけ離れたスケールになると思われる大規模  
建設の場合には、それが重要なことである。  
今回の課題において、実在の敷地を設定した  
上で計画を進めることとして、まず東京都体  
育館を実際に見てもらったのは、体育館その  
ものの空間構成・構造システムもさることな  
がら、周辺環境の中での建物のあり方や外構  
計画も見うえて、各自の設定した敷地にお  
ける大空間のシルエットを考えてもらいたか  
ったからである。

計画を行う際に、敷地を臨海部の埋立地に  
設定しても、既存市街地の中に設定しても、  
必ずその敷地のもっているエネルギーのベク  
トルが感じられるはずである。今回それが  
設定した敷地に、はたして何人の学生が実  
際に行ってそのエネルギーのベクトルを感じ、  
それを各自の計画に反映させたのだろうか。  
構造・材料系の先生方の構造システムのチェ  
ックの後にでてきたそれぞれの計画設定条件  
とポリームスタディモデルにおいては、それ  
がほとんど感じられなかった。そしてエスキ  
ースチェックを何回か行った後のそれぞれの  
提出図面を見て、改めてそのことを考えてし  
まった。各自がそれぞれ敷地設定をした理由、  
それと計画した建物との関係、さらに空間イ  
メージを決定する構造システムの設定、それ

高田典夫 Norio Takata

1951年 東京都生まれ。

1974年 東京工業大学建築学科卒業

1976年 東京工業大学建築学科大学院修士修了

同大工学部助手(長津田計画室)

78~90 横総合計画事務所

90~91 レンゾ=ピアノ・ビルディング・ワークシ

ョップ・ジャパン

91~ ヘルム建築・都市・コンサルタント取締役

主な作品: 中野坂上本町2丁目地区第1種市街地再  
開発('96年竣工予定)、関西国際空港旅客ターミナル  
ビル('94年竣工予定)、東京都体育館、慶応義塾日吉  
図書館、都営多摩ニュータウン南大沢団地

- 課題: 大空間建築  
(建築面積約1haの大架構空間を設計する)
- 敷地: 各自設定すること  
(ただし、東京臨海部等の具体的な敷地を  
設定すること)
- 機能: 自由  
(サッカー場・野球場・プール等のスポー  
ツ施設、展示場・野外劇場・遊戯施設な  
ど各自自由に設定すること)  
(敷地・建物規模を設定する場合、提出物  
の用紙サイズを考慮すること)
- 提出物:

- ①模型 1:300
- ②図面 A1版3枚におさめること
- a. 配置図 1:500  
(周辺環境との関係が説明できる図面であること)
- b. 平面図 1:300
- c. 立面図 1:300 2面以上
- d. 断面図 1:300 2面以上
- e. 説明図  
(計画コンセプト及び構造システムの説明)
- f. 仕上表
- g. 透視図  
(外観及び内観着色)

らがほとんど関連していないという案が大半  
であったし、敷地との関係を説明してくれた  
学生は数えるほどであった。

小出良純君の体育館は、単純なシルエット  
のシェルターを吊り構造材を若干オーバース  
ケール気味に付加することによって全体とし  
てバランスさせている。久保田宗穂君の海上  
交通ターミナルは、構造的に無駄な部分や理  
解しがたい部分もあるが、膜構造を用いたダ  
イナミックな構成で、構造システムと空間構  
成がうまく勢いを表している。膜構造を用  
いたいくつかの案の中では、その構造の特  
殊性をうまく表現している。濱田陽君の体育  
館は、今回数多くみられた立体トラスによる  
シェルターの一つであるが、それをアルマジ  
ロ状に分節することにより単純になりがちな  
空間構成に変化をつけて、立体トラスグル  
ープの中ではうまくまとめている。仲胆君の体  
育館は、体育館とプールという2つの大空間  
をボックストラスと吊り構造というダイナミ  
ックな構造システムでまとめ、そこに点景と  
してのレストランを効果的に配している。構  
造的に若干の疑問があるが、それをはるかに  
越えた空間構力力がみられるとともに、卓越  
したプレゼンテーションが印象的である。

プレゼンテーションというのは、各自が考  
えたことをいかに他の人に正確に、印象的に  
伝えるかということであると思う。したがっ  
て設計意図が明確になっていなければ伝える  
ことができないのは当然である。限られた図  
面の中でそれを伝えるためには、ポイントを  
押さええない限りそれは可能にならない。たと

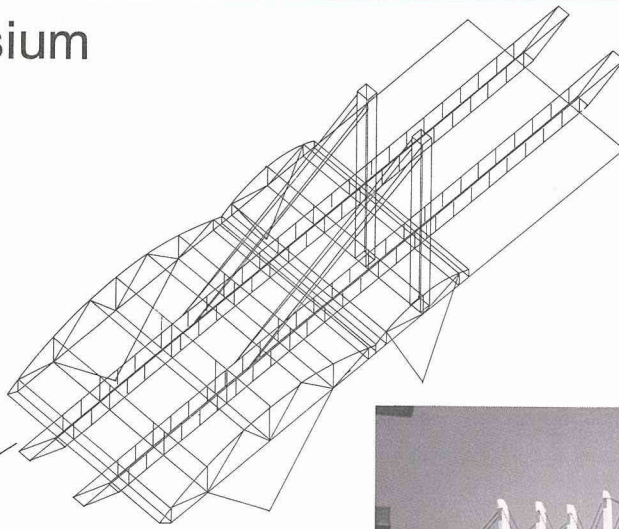
えば立面図では何をいいたいのか、内観透視  
図で描くシーンにおけるハイライトは何なの  
か、ただ漠然と要求図面だけで紙が埋まって  
いけばいいわけではないのである。特に、今  
回の課題における外観透視図においては、前  
述した課題意図により、人間や植栽などの点  
景をいれることにより、周辺環境との関係  
をきちんと描いてほしかった。鳥かんの眺め  
は模型で十分見ることができるのだから。し  
かし、全般的に言って、提出された模型には  
空間構成の意図を伝えようとする工夫が感じ  
られない。構造システムの説明も求めている  
課題であるのだから、部分的にでも構造のシ  
ステムを模型でも表現すべきであろう。

大空間を計画し、それをきちんと表現する  
には若干課題期間が短かったかもしれない  
が、どのようにその課題にアプローチすれば  
いいかということは、どのような課題であ  
ろうと基本的には違いがないはずである。各自  
が今回の課題で何をハイライトとして取り組  
みたいかということがはっきりしていれば、  
自ずとその手法が見えてくる。各々の計画  
における売り物は何なのか、ということが提出  
された課題のほとんどで見えてこないの  
である。その結果、講評時の各自の設計意図説明  
にはほとんど失望をした。視覚的に設計意図  
を表現することはもちろんであるが、言葉で  
もきちんと伝える訓練をする必要があると思  
う。

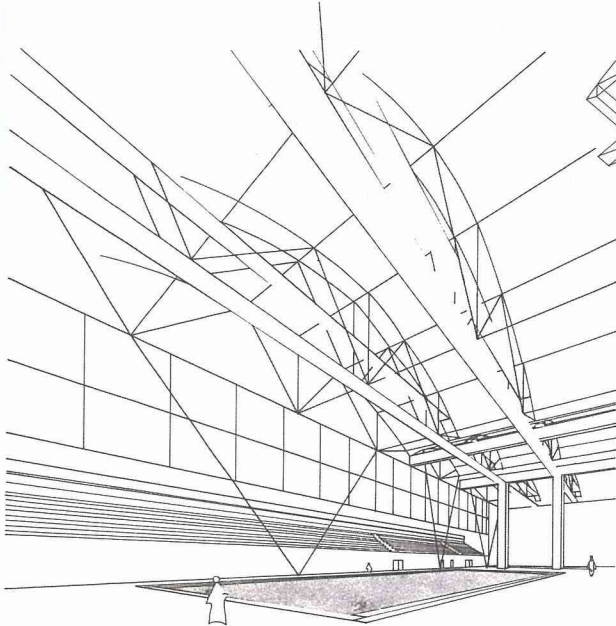
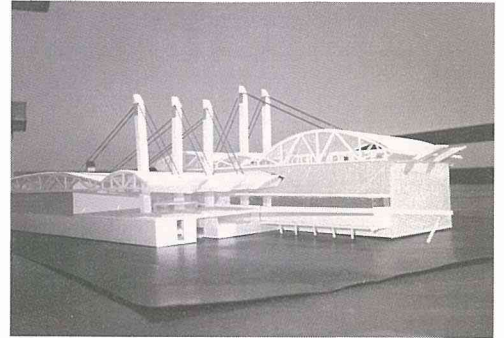
# Minatomirai 21 Gymnasium

仲 胆

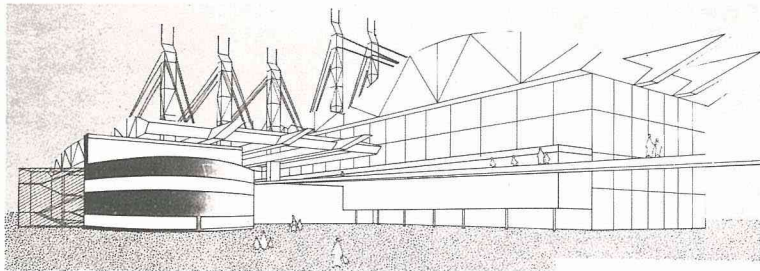
Makoto Naka



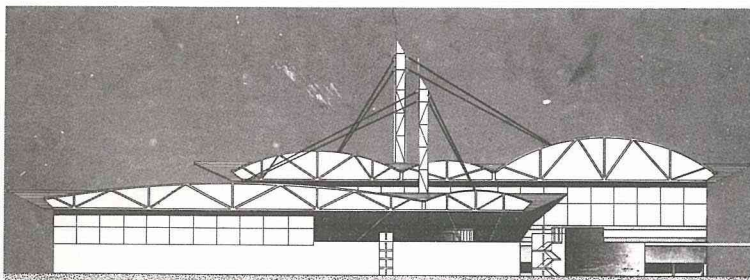
structure system



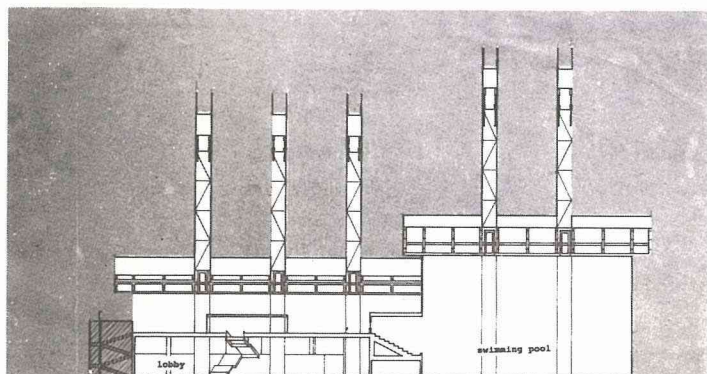
perspective



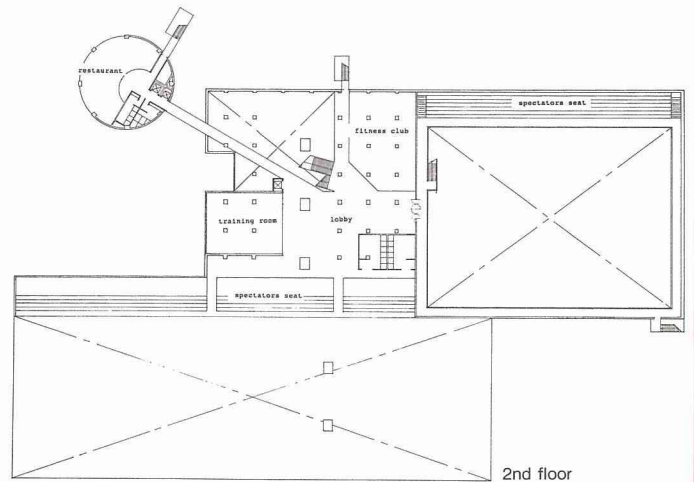
perspective



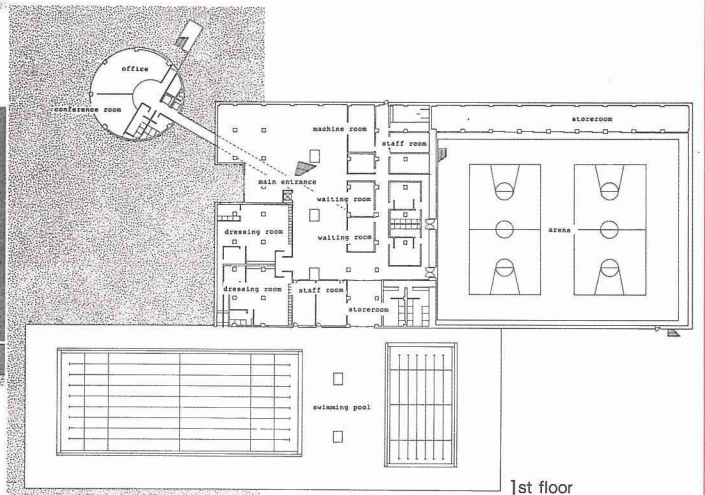
north elevation



section



2nd floor



1st floor

■敷地は「横浜みなとみらい21」地区のランドマークタワーの隣に位置する。建物には、体育館・プール・フィットネスクラブ・トレーニングセンターが含まれている。■構造は5本の大きな鉄骨柱を立て、その柱で2枚の屋根を吊るもので、風による吹き上げを防ぐために屋根をケーブルで止めている。屋根はトラスでできている。エントランス部は、桜木町から動く歩道に乗

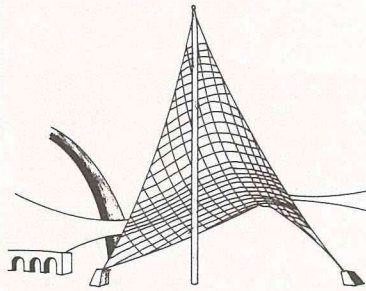
て、そのまま階段を下りずに入れる3階部分と、メインエントランスの1階部分の2カ所ある。■外観のイメージは、「みなとみらい21」地区にふさわしく、船と波と近未来をキーワードに考えた。5本の柱、屋根を吊るケーブルがさながら帆船のように見え、2隻の帆船がすれちがっているように見えるのではないかと考えた。

# 羽田海上交通ターミナル

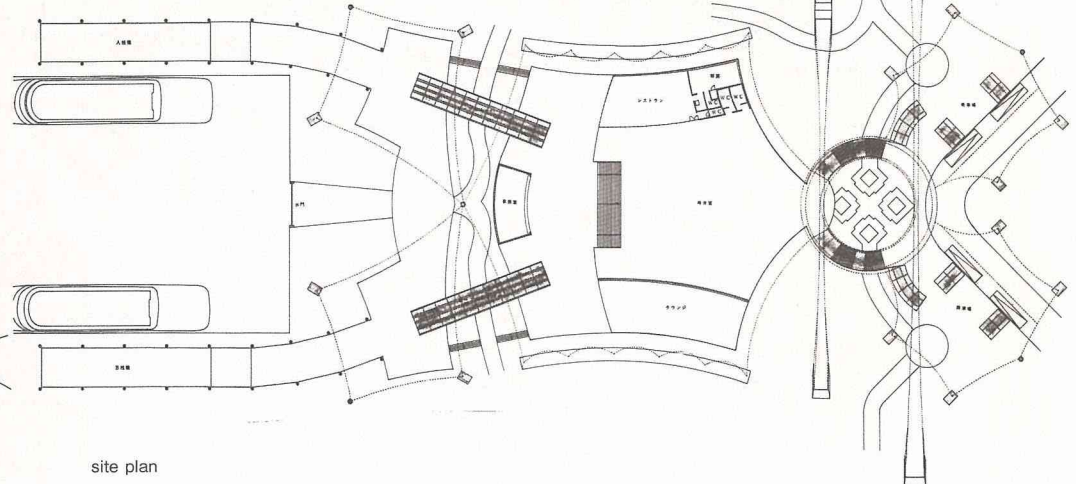
Haneda Marine Traffic Terminal

久保田宗穂

Munenori Kubota



structure system



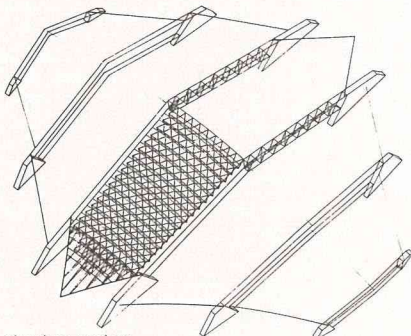
site plan

# 新橋競技館

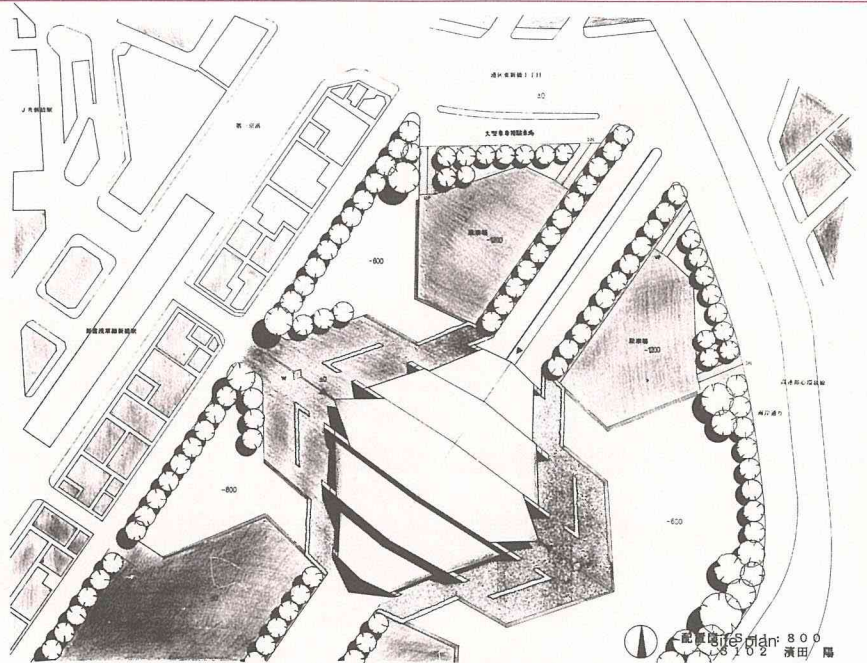
Gymnasium at Shinbashi

濱田 陽

You Hamada



structure system

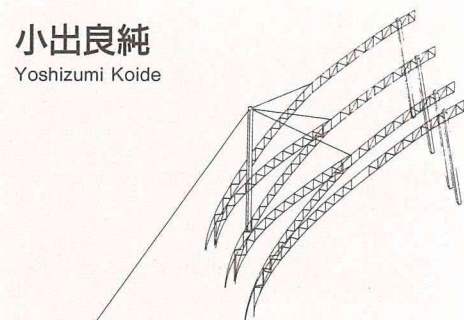


# 体育館

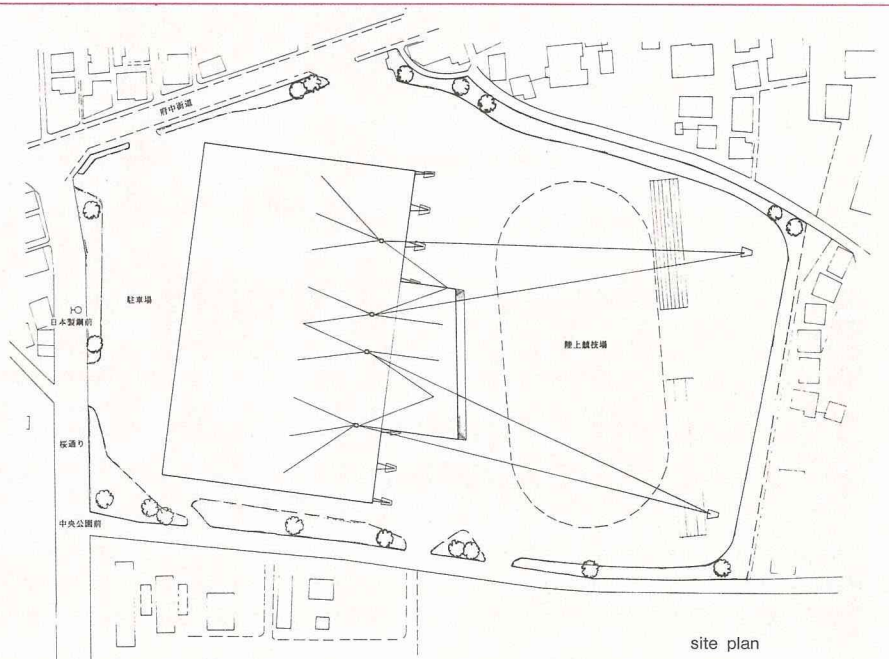
Gymnasium

小出良純

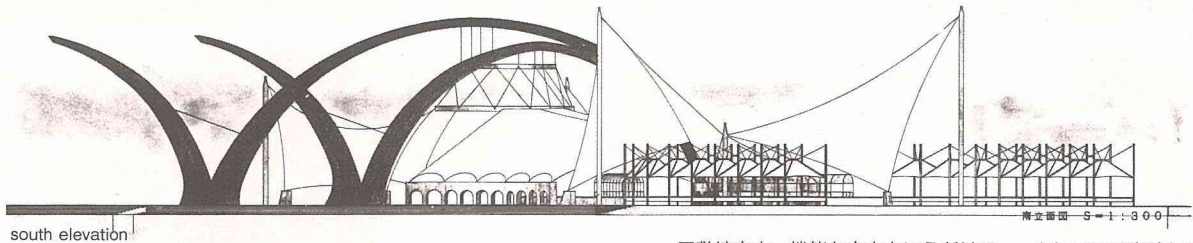
Yoshizumi Koide



structure system



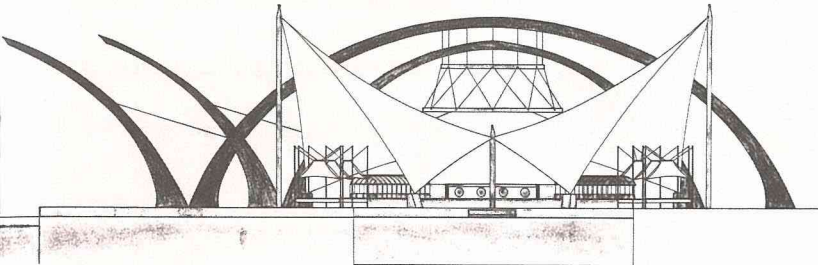
site plan



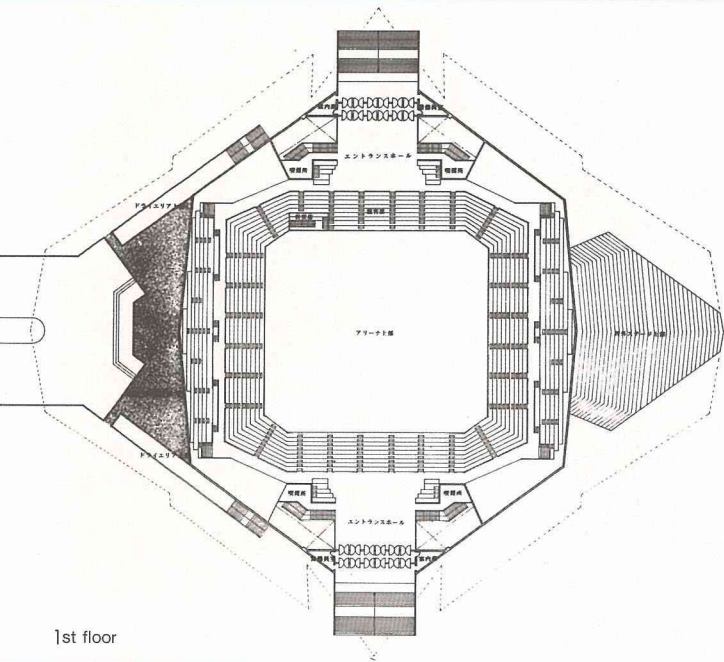
south elevation

■敷地自由、機能も自由というだけの、かなりまかされた課題を与えられ、まず自分がこれから設計しようとする建物が社会の中でどのような役割を担うのか、今の人たちが求めている生活がどのような生活なのかということをやから考えはじめた。■その頃ちょうど大前研一の『平成維新Part II』を読んでいて、そのサブタイトルに「国家主義から生活者主義へ」と書かれていた。そこで生活者の論理で東京を見てみると、東京湾の使い方がうまくないと感じた。房総半島と三浦半島に囲

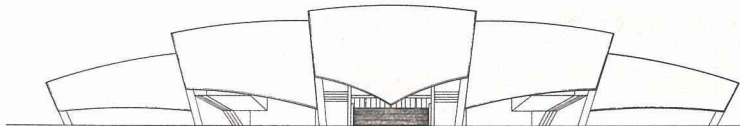
まれていて波がとても穏やかなのに、生活者が遊びに行くことをあまり歓迎しないかに見える。そこで東京湾内の海上交通ネットワークを想定して、その中心的施設を羽田空港の近くに設定した。■構造には二重アーチから2つのリングを吊り、このリングを介して3つの膜構造のテンションをバランスさせるというシステムを考えた。二重アーチに取り付けている構造に無関係のものは、この建物が移動のための施設であることを感じられるように意図したものである。



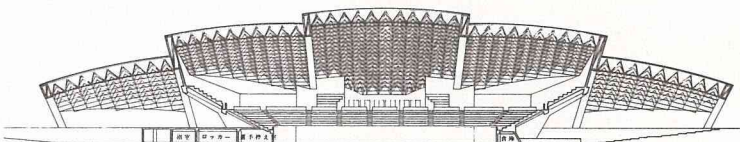
southeast elevation



1st floor



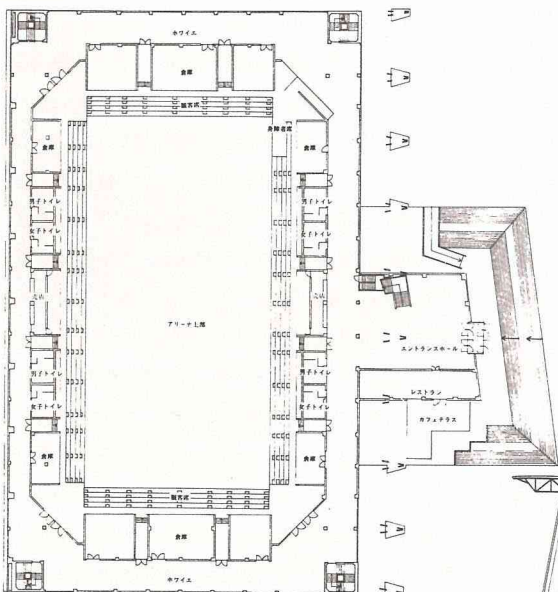
west elevation



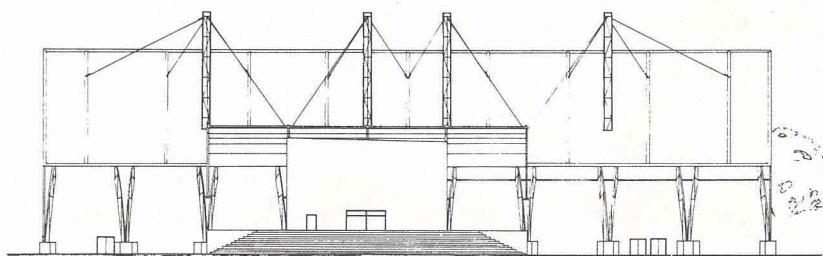
section

■計画地は新橋駅と首都高速、海岸通りに挟まれた交通の要所である新橋。ここは、企業の本社ビルの建ち並ぶオフィス街である。日々、企業戦士たちが、戦いを繰り広げている街である。■この競技館の屋根は、この街に融合できる冷たく固い鎧をイメージしてデザインされている。周辺環境との調和を考え、緩い角度で立ち上げられた屋根は、高さを感じさせないようになっ

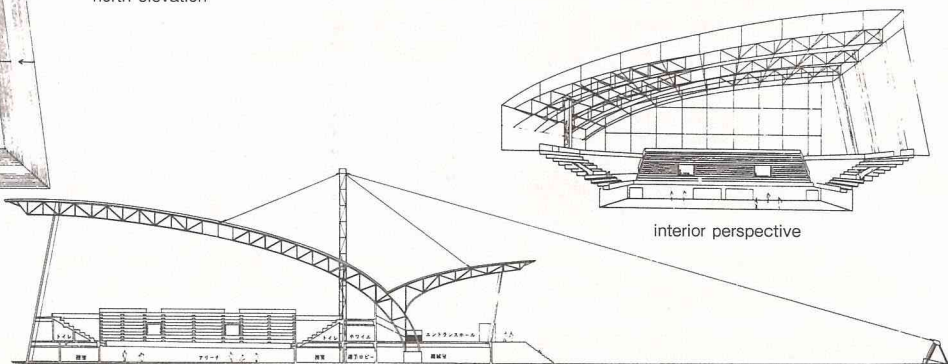
ている。屋根構造は、組立体操の扇をイメージして5枚の立体トラスによる屋根で構成されており、下方の屋根が倒れて広がろうとするのを上方の屋根が押さえている。また、5枚の屋根のうち、3枚がアリーナと観客席を覆い、屋内空間を形成し、両端の2枚は、野外ステージとロータリー、選手用入口を覆い屋外空間を形成している。



2nd floor



north elevation



interior perspective

# 未来の構築 アメリカ合衆国と日本における“1世帯住宅”のシナリオ

“Fabricating the Future” scenarios for “the single-family home” in the U.S.A. and Japan

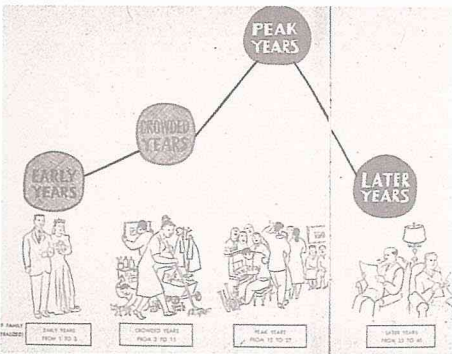
## デビット・ボンスティール (ワシントン大学名誉教授)

David L. Bonsteel, professor emeritus University of Washington

翻訳:小林久剛 Hisataka Kobayashi (修士1年)

ボンスティール教授は長い間、ビルディングタイプとしての住宅に関心をもたれており、近年ではアメリカ合衆国と日本の“1世帯住宅”に関する比較研究にまでその関心を広げられておられる。

ほぼ、その教職の立場を退いた今、ご夫人のジョアンナさんを伴われ毎年ある期間旅行をされている。イングランドのCharmouth、スペイン、アンダルシア地方のAlmunecar、そして今年はこちら日本で(アットホーム)な気分になれるかどうか旅行をしながら考えるのが好きという。



1

●授業での議論の主眼を“1世帯住宅”のための将来像を見出すことにおいた。学生にはある特定の家族のライフスタイル、あるいは新しいタイプの住宅への期待をシナリオとして描くように求めた。

●新しい住宅の可能性は、新たな家族形態にある。アメリカ、日本の両方にみられる“DINKS”(DOUBLE INCOME NO KIDS)やアメリカよりも日本でより一般的な(3世代)住宅、そしてアメリカにみられる片親の(鍵っ子)の家などはその例である。これらはRobert Gutheimが1940年代に小冊子“HOUSE FOR FAMILY LIVING”で初めて言及したライフスタイルや行動様式のバリエーションである。1

## Working Women Speak Out on Home Design

2

●職場や家庭における女性の役割の変化に伴い、住宅の外での新たな期待や行動につながるような住宅に変わってきた。これらの変化の多くはすでにアメリカの住宅には組み込まれている。日本の家庭では(ウエスタンスタイル)の住宅を賞賛し、それを所有しようとするほどであり、日本人の妻たちはこういった新しいデザインを楽しんでいる。2③

3

5

●場所を問わず非常に重要となるのは、(入手可能な(affordable))住宅についての論議である。アメリカのように建物それ自体にかかる費用が土地の価格の3倍から5倍であるところでは、デザイン上の解決は、よりコンパクト、あるいはより小さい住宅を作ることによって焦点が当てられるのかもしれない。日本の都市部では土地の価格が建物にかかる費用の4倍から6倍にもなっている。そこで、住宅を垂直方向にのぼすことに関心が向けられる。上がり続ける住宅の価格に対応するための他の解決として、3世代家庭や共働き家庭が考えられる。(製品化(manufactured))住宅は積水ハウスや移動住宅のように標準化された工業化製品によって建設コストを下げる別の試みである。移動式住宅産業は伝統的な



デビット・L・ボンスティール

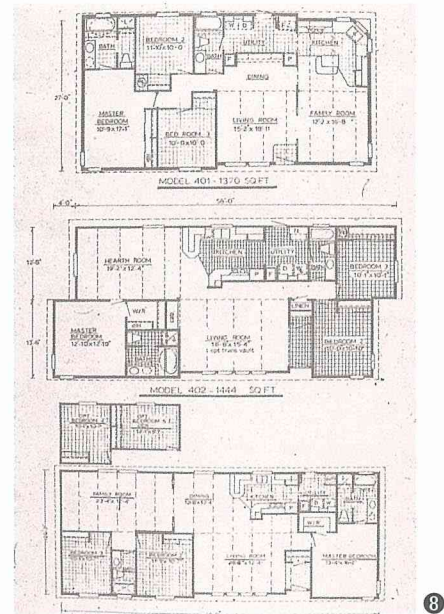
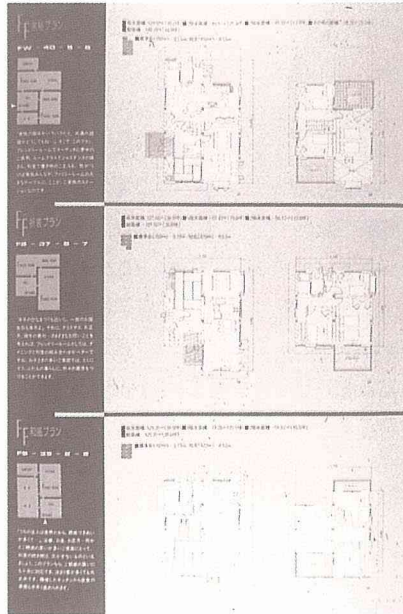
1926年 アメリカ合衆国生まれ  
 1964年 ワシントン大学大学院卒業、建築学修士  
 50～52年 アイダホ州立大学建築学科助教授  
 53～61年 コンラッド・シン普森建築事務所他勤務  
 61～63年 オレゴン州立大学建築都市計画学部助教授  
 64～88年 ワシントン大学建築都市計画学部助教授をへて副主任  
 88年～ 同大学建築都市計画学部名誉教授

研究業績: フィクレスト学校マスタープラン, 日本と北西アメリカにおける独立住宅の比較研究, プレザントヒルのシェーカーコミュニティに関する研究

●住宅市場は新しく起こった社会的関心に敏感でなければならない。省エネルギー論争は日本ではそれほどインパクトを与えなかったが、ヨーロッパとアメリカの住宅の形態を再構成させることとなった。建物のライフサイクルから見た、エネルギー消費を抑えるための建物の規約に変化が起きたのに加えて、〈パッシブ・ソーラー〉ハウスといわれる新しいタイプの住宅が開発されてきている。

〈温室〉や太陽光を採り入れる空間をもつこのような住宅の特徴は、その空間が他の部屋に対して解放されていることである。これは英国にも見られるものであるし、アメリカの住宅の建築様式を説明するために東京に建てられた〈SUMMIT HOUSE〉にも見られる。またイギリスの建築系の学生は、〈自立した住宅(autonomous house)〉と名づけた研究を行い、提案してきた。これは、生活できる必要最小限の自然資源の使用、およびエネルギー消費を減らした住宅である。④⑤

住宅のほぼ3分の2の価格で住宅を供給する。それは日本よりも広いアメリカの道路で運び、敷地で組み立てられる大きな部品(多くの場合わずか2つ)を生産することによって可能になっているのである。⑥⑦⑧



●入手可能な住宅に関する論争は、デザイン上の努力によって容易に解決される問題ではない。〈労働付加による所有権(sweat-equity)〉という概念、つまり家族が自分たちの住宅の建設過程において労働力を提供するという考え方は、アメリカやヨーロッパでますます一般的になってきている。注目に値する例は、イギリス人建築家Walter Segalの作品である。彼は訓練を受けていない人びとが自分たちで建設できる、柱一梁の軸組システムを発展させた。より最近の例としては、アメリカの慈善団体、“HABITAT”が寄付された労働力と材料を使用して恵まれない人びとや年輩の人びとのための住宅を建設している。1992年、“HABITAT”はアメリカで22番目の規模の建設業者となった。⑨⑩

課題として、ある特別な家庭のライフスタイル、あるいは革新的な住宅の型を提案する〈シナリオ〉を学生に要求したが、ある学生は〈3世代〉の家庭や〈創造的な女性〉のいる家庭を描写し、またある学生は伝統的な民家の革新的な解釈案や、〈天文学〉、〈自然への愛着〉などの特別な関心に見合うようデザインされた住宅に住む家族を描写することを選んだ。

どのシナリオも家族のライフスタイルや将来への希望(期待)に立脚点をおいており、生じてくる要求や欲求を満たすような創造的デザインの基盤となりうるであろう。

# 八景島をプロデュースする

Producing “Hakkeijima”

## 角永 博さん

Hiroshi Suminaga

インタビューに先駆けて、八景島シーパラダイスを見学してきた。八景島へのアクセスはモノレール・自家用車・大型バスの3種類。モノレールの八景島駅から起伏のついた橋を渡ると、左手に島のシンボルである水族館が見えてくる。入口にはメリーゴーランドがあり、思ったより遊園地らしい雰囲気である。自家用車利用の人も対岸で車を置いて橋から島に渡る。観光バスだけが島の中央部まで導入された国道357で、島中央からアクセスする。入口が分散しているせいか、園内はどう歩いて行けばよいのか少し分かりにくい気がした。

水族館に入ると、最初は淡水魚のコーナーがあり、屋内と屋外がうまく混合された空間となっていて、植栽にも工夫が見られる。雨の時はどうなるのだろうという素朴な疑問がわいた。館内は二層分の高さをもたせて上下から水中が観察できる工夫や、話題となったエスカレーターが通り抜けるトンネル状水槽、見上げるような高い水槽など新鮮な魅力が感じられ、展示内容、ショーなども大変充実している。最終回のショーの後に会場の最上段から見える夜景はとても素晴らしい。水族館としては葛西臨海水族園と並んでレベルの高いものと言えるだろう。

島の全体計画としては、芝生スペース、レストラン・店舗などの商業施設、マリーナ、乗り物など、来島者の嗜好によって多彩な選択が可能になるように計画されている。中でも商業施設の充実ぶりは驚くほどだ。観光バスで来ているツアーの外国人観光客から、芝生でフリスビーをする高校生まで、非日常性から日常性までも楽しめる広範囲の許容力が感じられた。

**八景島シーパラダイスを実際に見てきたのですが、この作品において特に苦勞された点というのはどのようなところでしょうか？**

この計画は、建築主・施工者・市の3者が関係し、事業者にしても思惑の違う多数の会社（西武・京急・清水・銀行など9社）が参加しており、それぞれが自社のデメリットをなくそうとするわけですから、それら一つにまとめることは大変でした。このような事業計画は今まで設計事務所があまり得意としていなかった分野であり、苦勞した点でもあるのですが、いい経験ともなりました。CADやコンピューターなどが発達してきていることもあり、これからの設計事務所はただ図面を描くだけではやっていけなくなるのではないかと思います。こういったコーディネートプロデュースも担当し、事業に対する計画にも関わらなければならないと思います。

**事業プロデュースということですが、つまり、水族館以外も含めた全体を計画されたわけですね？**

島全体24haの提案ということで、島全体の利用方法、道路などの動線、入島無料といった運営方針まですべてを計画しました。昭和40年代、この辺り一帯を含めて大規模な埋め立て計画が行われ、その際、失われた金沢八景の環境の代償としてこの島がつくられました。そして、7年ほど前に事業コンペがあり、その際は水族館とマリーナの設置が要請されていた以外は、すべてを設計事務所がイニシアチブをとり計画しました。島内の建物も全てデザインシステムによるもので、実際には5、6名ほどのグループでおこなったわけですが、その他に外部から照明デザイナー、インテリアデザイナーなどさま

ざまなデザイナーを集めてまとめる、といったプロデュースもおこないました。

**このような施設では規模設定などが非常に難しいと思います。八景島でも半年で既に700万人以上の人びとが訪れているそうですが――**

もともとは市が200万人/年で設定していたのですが、この入場者数でフィジビリティスタディをすると、成立しないことになるので、300万人に設定し直して収支計算を合わせたのです。しかし、実際は、不景気の中に明るさを求めたのか、「安・近・楽（安い・近い・楽しい）」というニーズに合致したためか、このように多くの人びとが訪れたのです。多くの人びとが訪れたということは事業としてはいいことであるかもしないのですが、その反面、インフラ設備が足りない（電気容量の不足、水の不足等が生じ）電気・水道の増強などを行いました。こういった計画の誤算も多勢の入場者により責任は追求されなかったようです。

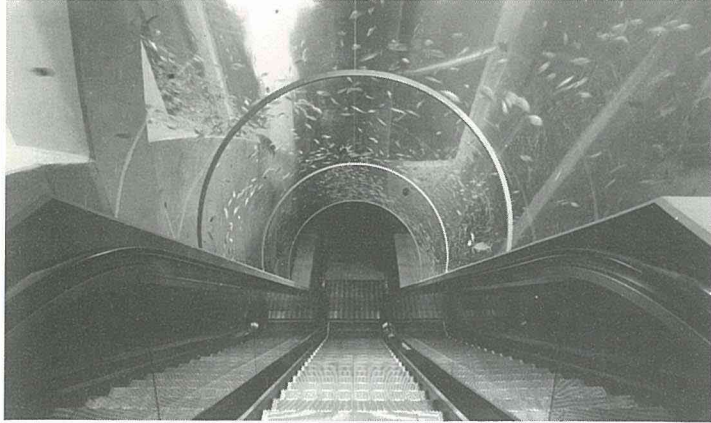
▼水族館のショープール

写真：新建築提供



**八景島の特色として入島無料というのが挙げられます。それが入場者が予定を上まわっている最大の原因とも考えられますが、計画時には経営面での知識も要したと思いますが、いかがでしょうか。**

事業主体となっている西武鉄道のグループは、マリーナ・ホテル・遊園地など各方面のスペシャリストをもち、それらをまとめるのがわれわれということです。1人当たりの消費単価を最終的に算出するわけですが、結局、入島無料にする分を乗車料や他の利用料に分散させるということになります。入島無料にすると、消費単価は固定されませんが、そういったことに関してはそれほど心配していませんでした。入島無料にするということは、来島者の選択肢を非常に豊富にしていることになり、ユーザーが自分のニーズに合わせていろいろな選択ができるのです。たとえば、家族で公園に来て、弁当を食べて、広場や水辺で遊ぶだけならばお金はかかりませんし、カップル



▲水族館の海中エスカレーター

写真：新建築提供

で来て、水族館に行って、その後レストランで夕食をするというならば、6~7000円でしょうか。また、マリナーの係留料は3000万円ですから、ヨットとあわせれば1億円になります。0円から1億円までという選択肢があるわけです。誰が来てもいいのです。レジャー・レクリエーション・ショップといったものを自由に選択できるのです。こういう計画だからこそ現代人の感覚に合い、たくさんの客が訪れたのではないのでしょうか。

### 水族館は他の建物よりコストが高 いように思いましたがどう ですか。

他の施設とはまったく異なります。水族館の計画にはいちばん力を入れていますし、いちばん面白い仕事でした。コスト的にも数倍(300万円/坪)になっています。水は大島付近から取水運搬しています。全部取り替えると水だけで5000万円にもなります。八景島周辺の水では残念ながら魚には使えません。

### 学生時代はどのように過ごされま したか。

私は、仙田先生と同級で、彼が谷口研にいて、私は清家研でした。当時は40人くらいしかいませんで、しかも研究室もたくさんありました。大学ではヨット部に入りましたが、当時のヨット部は弱小でした。清家先生もヨットに乗り、海に関係する先生だということで清家研に入りました。卒業後1年ほどゼネコンに、その後また清家先生のところにもどったのですが、当時、清家先生とのつながりというのは「ヨットをやっている」ということがいちばん強かったと思います。大学1年のころは大学紛争でほとんど授業はありませんでしたし、でも、研究室は楽しかったですね。研究室には清家先生のヨ

ットが三浦半島にあり、研究室みんなで合宿をして交流を深めました。東工大に入り、ヨット部に入り、研究室でヨットをやり、その後の人生もヨットで決まっていきました。事務所ではまず、万博の仕事をし、その後海中公園の仕事をやったのですが、これもヨットをやっているから海のことをよく知っているだろうということで任されたわけです。その後も日本全国の海中公園の指定、ビジターセンターといった仕事をやり、いつのまにか海の仕事をしているということで、水族館をいくつか計画したというわけです。そして八景島に至るわけですが、すべてはヨットからつながっていて、キーワードとして「海」があったと考えられます。大学に入ってからずっと海ですね。

### 現在の仕事のペースについてお聞 きしたいのですが。

仕事の種類としては今までに経験のないものにトライするのが楽しいことです。経験のないものに対してはいろいろ見たり、聞いたりして自分なりのイメージを創るのですが、繰り返しもなると手慣れてきますが、その反面いろいろな面で希薄になってきます。

### どのようにすればよいデザインが できるのでしょうか。

自分がやっているのがいちばんいいと思うことです。もともとデザインは主観、客観の問題ですからね。製図はダメでもアイデアはいいかもしれないし、何か一つでもこれがいちばんいいんだと自信をもつことではないでしょうか。デザインというのは計量化できませんから、自分でこれがいちばんと思うことです。やっぱり自信です。それから、建築以外の知識ですね。東工大は単科大であり、他の分野とのつながりが少な

## 清家先生に聞く

デザインシステムの清家先生に自宅にてお話をうかがった。飄々と語られるお話はユーモアを混じえつつ、八景島から創世記古事記のオノコロ島から大八州(おおやしま)邪馬台国へと広がっていった。

八景島コンペはどうでしたか?

「コンペに出す以上は当選しようと思って出すわけでしょう。でも、自慢にはならないが私の関係した図案で、この50年来コンペで1等になったことはありません。コンペというのは労多くして功少ないものですね。

この八景島コンペは企業コンペということで、いわゆるイベント産業・興業師的コンセプトをどのよう盛上げたらよいかという勝負です。そういうことで、海のことなら、シマのことなら任せて!とその労をいとわず参加したわけです。

しかし清家研究室の伝統はご存知のように船の錨の刺青こそ彫っていませんが、イベントの目玉は



経験豊かな水族館とマリナーと海上ジェットコースター、それに帝国海軍以来の潮気いっぱい遊具のコンセプトでした。さらに海浜のプロムナードはデザインシステムの婚期を失いかけていたスタッフの想いが込められていたからでしょう。生まれて初めてコンペの1等に入選! ありがとうございます。パートナーとスタッフのおかげです。」

清家先生は帰り際に「面白いものを聞かせましょう」といって、即興演奏をなさった。インドネシアのガメランの木琴とリズムマシーンを同時に奏でる姿はあたかも先生の作風を暗示しているかのようだった。

\*八景島については、徳間書店『柏木委員長八景島の推理』斉藤栄著を参照のこと。

い分ハンディを背負っていると思います。他の分野との交流のようなものも必要だと思います。

### 学生に対して何かアドバイスを お願いします。

学生時代に習ったものが必ずしも役に立つとは限らないので(実務において)、何でも受け入れられる下地をつくっておくことです。東工大に入れるぐらいだから頭脳明晰なわけですから。後は、何か一つでも特技があるといいと思います。模型がうま

いとか、パスがうまいとかいうことは設計事務所においてはいいかもしれない。それから、工大の建築と美大の建築の違いというものがもう少し明確であるといいのかもしれないね。感性では工大生は美大生に劣るかもしれませんが、それらを補うことが必要であり、どうやって「工大の出」という特徴をだすかということがこれからは必要ではないでしょうか。



角永 博 Hiroshi Suminaga

1940年 東京都生まれ  
1964年 東京工業大学建築学科卒業  
1968年 デザインシステム入社  
現在 同社代表取締役、(財)海中公園センター評議員  
主な担当: EXPO'70 国連館、海中公園センター八重山研究所、伊豆三津シーパラダイス('78年BCS賞・沼津市建築賞)、軽井沢プリンスホテル南館('83年BCS賞)、野尻湖プリンスホテル、新富良野プリンスホテル、在シンガポール日本大使公邸

## 街に構える

Looking at Townscape

## 村田靖夫さん

Yasuo Murata

今回は、設計者の村田さんの案内で池之端の町屋と丸安毛糸ビルの見学を行った。

## ●池之端の町屋

この住宅は台東区池之端にあり、1階に店舗と親世帯、2、3階に子世帯のある2世帯住宅である。千代田線の根津駅から下町の佇まいを残す住宅街を5分程歩くと、「池之端の町屋」に到着する。住宅は3階建てだが、通りに面した側は隣家と軒をあわせて2階建てになっている。町並みとの調和ということで“町屋”という考えが取り込まれている。ファサードは、全体としてはすっきりした感じを受けるが、白く塗られた壁面、開口部、タイル、加えて植栽などによってリズムカルな印象と、赤いサッシのついたガラス張りの店舗と連続した中庭に心地よい透明感を感じる。

外階段を上がり、玄関に入ると天井にトップライトがあり、青空が見える。玄関はかなり広く、気持ち

いい。家族の居室は、中庭に面した側は全面ガラス窓になっていて明るい。居間から見ると中庭を隔てて隣家が迫っている。やはり都内は密集している、などと思いつつ3階へ上がっていく。3階に上がるとプライベートルーム・浴室・洗面所・トイレが機能的に配置されている。内部を区切る壁の上部はどれもガラスになっており、明かりが外に漏れることによって家族の様子が変わるようになっていく。

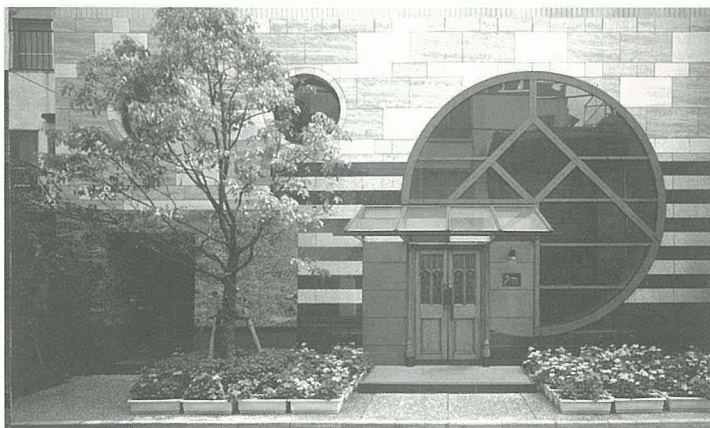
1階に降り、コーヒーをいれただいたので、中庭でいただくことになった。中庭にいて、都会の喧騒から離れて京都の町屋の坪庭にいるような感じを受けた。通りから見ただけの中庭の印象と比べて、中庭から通りを見るほうが通りまでの距離を長く感じ、空間に安心感を与えているのではないだろうか。おそらくこれが中庭空間の一つの魅力なのだろう。空間が生活の暖かな結びつきを提案してくれたという感じがした。(詳細は『住宅建築9105』参照)

## ●丸安毛糸ビル

両国駅の近くにある「両国国技館」、「江戸東京博物館」とは線路を隔てて反対側の、下町の雰囲気をおそらくに残した通りに突如「丸安毛糸ビル」は現れた。

アンティークなドアと一体になった丸窓が印象的だ。壁材は御影石・大理石・タイルなど多種にわたり、ファサードには多様な様式が採用されている。この建物は部分的に見るとかなり奇抜だが、全体としては街

並にしっかりとあっている。これは周囲の雑然とした建物のスケールにあわせて、ファサードの表現を分節していることによるのかもしれない。村田さんは「丸安毛糸ビル」の社長の岡崎さんと十年来の知り合いで、今回本社を建て直すということで、村田さんに設計を依頼されたという。建物は、1階に社長の趣味を生かしたアンティークなコーヒージョップがあり、2階以上がオフィスになっている。(詳細は『住宅特集9307』参照)



▲丸安毛糸ビル

まず、村田さんのお仕事についてお聞かせください。

私の仕事の中心は、住宅の設計です。「住宅」と一言で言っても30坪程度のもので200坪程度のものでさまざまです。仕事の量にすると、住宅を年に5、6件、オフィスビルが2〜3件程度になります。所員数は、私を含めて4〜5人です。

とりわけ“街並み”に対して考えていらっしゃるようですが、

街並みと一口にいても、歴史的な街並みの中に建築を建てるのと、東京のような都市の中に建てるのとでは、大きく異なると思いますが…。秩序のない設計は、都市をおもちゃ箱をひっくり返したようなアナキーな状況にしていきます。このような状態は決して良いことではありません。

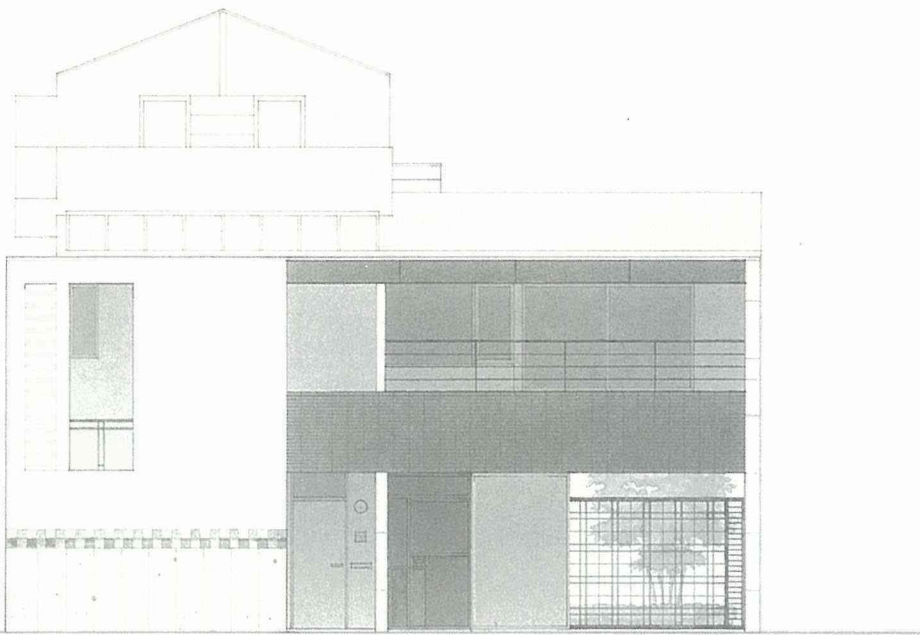
周囲の状況を見て、自分の設計していく建築によって周囲にささやかな変化を促していく。そういう意味では、今回たまたま見てもらった2作品は“街並み”を考えるのにふさわしいものだと思います。まず道路に対してきちんとした構えをとるということです。

「池之端の町屋」を例にしてお話してください。

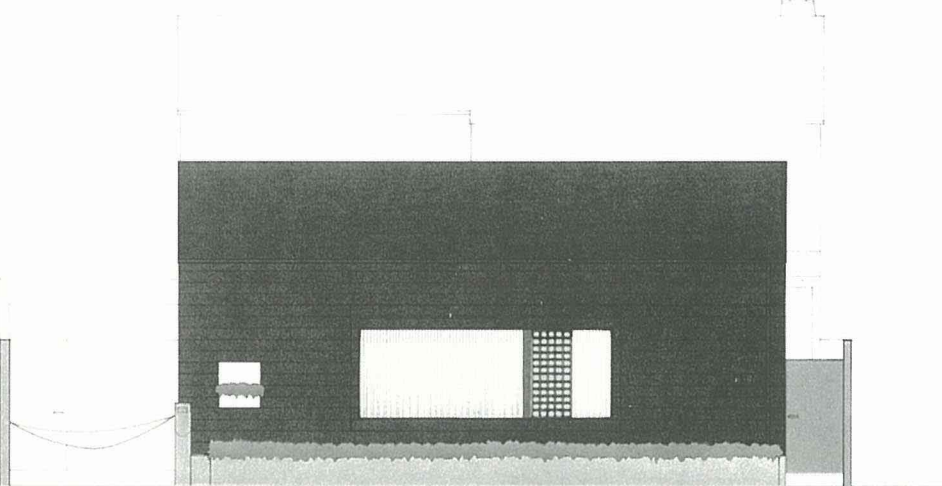
「池之端の町屋」の場合、都市型の住宅を作るという命題がありまして、2世帯住宅を何とかして住み心地のいい環境に作るとうしました。都市にふさわしい形の一つに中庭を含めたコートハウスがあると思います。平面的なプログラミングの結果だけでなく、建築的に表現が可能な限り、抑制させながらもファサードをきち



▲池野端の町屋



▲池之端の町屋



▲樹と簀の子のコートハウス

んと表現しています。私の仕事は、建物、建物の中の家具、そして建物以外の庭や植栽におよんでいます。

**ファサードのデザインを積極的に  
行うということを施主の方から提  
案されることはあるのですか**

“街に構える”という考えからの提案はほとんど私の方から行います。

「池之端の町屋」では、施主の方は全部コンクリートの打ち放しでよいと言っていました。やはりそれだけではなく、何らかの表現をしようとして提案しました。施主の方にもそれなりの考えがあるのはよくわかっていましたが、「都市の雑然とした街並みの中では少し強いファサードの表現をする必要がある。」と結局納得してもらいました。

**外部空間のとりこみ方に気を使っ  
ているようですか**

住宅の中にはあまりデザインを誇示しないようにしています。だから、というわけではないのですが、家の

中から見える“風景”を大切にします。とりわけ緑は好きですね。自然（緑）によって四季の変化を家にいながら感じることができるのはいいことです。

**どういったところに住宅設計の魅力  
を感じていますか。**

建築家は自由に設計が行えるようにみえますが、設計活動においては法的制限、施主のライフスタイルなどいろいろな条件を“引き受ける”こととなります。施主との細かい打ち合わせが必要となり、そこから「民主主義的手続きの尊重」という考えが生まれてきます。つまり、施主の方を含めてそれに携わっている人が一緒に作り上げていくという考えです。住宅設計は、その過程をすべて自分で見通せる、「掌ののっている」という感覚がいいのだと思います。

**村田さんの学生の頃の話をお聞かせ  
てください。**

私が学生の頃は学生と先生の関係が

良かったと思います。本館に建築学科があって、人文、社会系の先生とも交流がありました。研究室の清家先生は、いろいろなことを学生に教えるというより、存在自体が何かを語っているというような雰囲気をもった人だったと思います。その当時学生のスターはやはり磯崎新さんでしたね。外国の建築家では、ジェームズ・スターリングやチャールズ・ムーアなどがよく話題にのぼりました。



**独立なさるまでのエピソードなどを聞かせてください。**

1968年に卒業したのですが、学生時代、当時大阪の坂倉事務所にいた西澤文隆さんの作品が好きでした。大阪まで行ってアルバイトしたこともあり。 “中庭”を設計に取り入れるのは、そんなところに影響を受けているのでしょう。大学4年の5月頃から坂倉から独立した東孝光さんのところでアルバイトを始めました。結局そのまま働くことになったんです。私が最初の所員だったんですよ。東さんの所では「スタッフや施主を含めて一緒に建築を組み立てよう」という感じがありました。建築のありようを学んだと思います。勤めて4年ほど経ったとき東さんに「君はそろそろ自分でやったら」といわれて住宅一つをまかされて独立したんです。

**仕事のメドがたっていたのですか。**

仕事のメドがあって独立したわけではなく、思い切って飛び込んだ感じなんです。独立してから半年後に10階建てのマンションの設計をしたんですが、このような規模のものは初めてで、いろいろと試行錯誤してやりました。

**学生に何かいいアドバイスを。**

人生は一度しかないのだし、何でもできる時だと思って、自分の生き方をきちんと決めることが必要だと思います。先輩としてアドバイスするなら、「自分の一生を通じて育てられる考え方をもつ」ということかな。自分を信じて、自分を育てていく。あまり安全になり過ぎないように。人生の中心は“勇気”だと思うんですよ。いざというとき勇気をもって飛び込んでいけるかどうか、その際に自分の信念が試されることになるのでしょ。

村田靖夫 Yasuo Murata

1945年 東京都生まれ  
1968年 東京工業大学建築学科卒業  
東孝光建築研究所  
1972年 村田靖夫建築研究室設立  
現在に至る  
主な作品：茂原の家、大きなコートハウス、シャモットブラウンの家

ベンジャミン・ウォーナーさんが事務所を構えるのは、青山にある同潤会アパートの一室。表参道に面しており、かなり賑やかな環境である。リチャード・ロジャースの日本支店とウォーナーさんの主宰するCDIを兼ねた事務所を今回訪問した。室内は白を基調として清潔感を堪えており、所員の方々がひきしまった面持ちで机に向かっての姿が印象的。ウォーナーさんは彫りの深い顔立ちで、かなりの身長をしておられ、圧倒されているわれわれを流暢な日本語で迎えてくださった。

## B.ウォーナーさんを訪ねて

Visiting Mr. Benjamin Warner

### まず経歴をきかせてください。

最初はコックさんになろうと思って料理学校に通ったんですが、以前より興味のあった建築を志し、ロンドンの大学に進み途中2年間ブラジルへ行きました。(イギリスの大学では単位取得のために実務経験が必要とされる。)その事務所の所長が日系人で、その頃から日本に興味があったんです。卒業後就いた仕事に満足できずにいた頃、友人から黒川雅之さんを紹介され、来日することになりました。彼の事務所にいた頃はキツかったですね。給料安くて、徹夜など無理をすることもしょっちゅうでしたが、所員は皆がんばりやで武士の世界を感じました。貴重な経験でしたよ。



ベンジャミン・ウォーナー  
Benjamin Warner

1954年 イギリスに生まれる。  
1980年 the polytechnic of Central London学部卒。学部生時代、ブラジルにて実務経験を積む。  
1981年 来日。黒川雅之氏の事務所に勤務の後、東工大修士課程に進む。  
その後、日建設計を経て帰英し、'87年リチャード・ロジャース設計事務所に入社。'88年、同社日本支店取締役として再来日。  
93年、ロジャースが日本で初めて手がけた歌舞伎町プロジェクト林原第5ビルを完成させる。  
現在、CDI青山スタジオ代表取締役、リチャード・ロジャース・ジャパン取締役。



▲青山の同潤会アパート



▲事務所内部



▲事務所ドアのプレート

その頃はあまりの忙しさに、日本語や日本の文化を勉強する余裕さえなく、東工大修士課程に進むことになる。

東工大では茶谷正洋先生のもとで勉強しました。日本の近代デザインに関する研究を行い、論文ではなく制作をしたんです。1年目は時間もあつたためバイクで日本一周をしました。社寺のような日本の木

造建築は興味深いですね。四国霊場八十八カ所巡りもしたんですよ。

### 東工大修了後、日建設計に1年間勤務。帰国を決意したとき、知り合いの紹介でリチャード・ロジャースに会うことになったんですね。

当時ロジャースには日本での仕事に見通しがあつたらしく、早く事務所に来るようにいわれました。現在、ロジャースの日本事務所は独立しており、私をいれて3人。他にCDIという自分の会社もやっています。

### 来日してすでに12年経つわけですが、日本の印象は？

私は、基本的には日本が好きです。好きじゃないとられないし、しかし閉鎖的な面はありますね。日本人の建築事務所より私の事務所の方が10倍ぐらい仕事は取りにくい、信用の問題でしょうか。ただ、リチャード・ロジャースの場合はネームバリューがあるので、若干やりやすいといえます。また民間より公共の仕事の方が取りにくい印象がありますね。

### 建築の創り方について、日英の違いはあるでしょうか？

まずイギリスの場合は、建築家が自分の建物に関する責任を100%もたなければならないので、詳細な図面にまで目を通します。いっぽう日本では、設計者は外観とか代表的なディテールを描きますが、イギリスに比べて図面の枚数ははるかに少ない。向こうでは建物に欠陥があれば裁判になりますが、こちらでは修理に来ておしまい。責任範囲の違いなんです。法律に関しても違いは当然ありますが、私は皆が言うほど日本が激

しいとは思いません。厳しいのはイギリスも同じです。

### 建築家と社会の関係はどうでしょう。

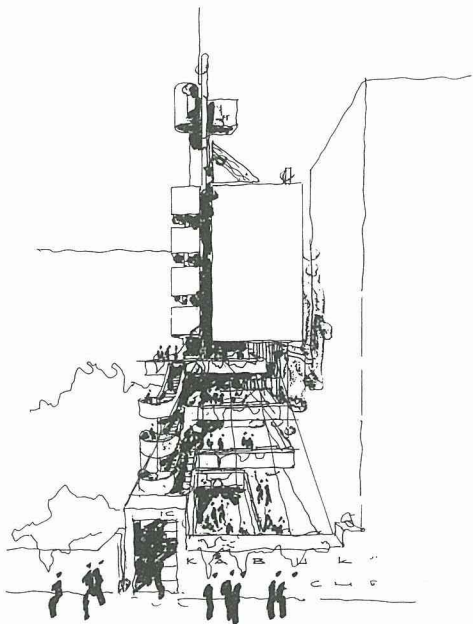
イギリスでは、建築家というのは結構きにくい職業で、クラスとしては上の方にあり尊敬されていると思います。日本では、あまりそういう印象はありませんよね。また向こうでは、一般の人びとでも建築に対する好き嫌いははっきりもっています。建築に示す興味は、イギリス国民の方が高いといえるかもしれません。

### 設計をしていく上で、日本の地域性、特殊性を考えますか。

法規的なこととか、業者との対応の仕方については当然考えます。また、特に自分の会社の場合は自分の名前を売り込むわけですから、他人と同じデザインにはできません。イギリス人を選ぶだけの価値のあるものがないとね。ただ、自分のやりたいようにしなくちゃいけない。これは大前提です。

### 先頃、新宿歌舞伎町にウォーナーさんが担当されたロジャースの作品が完成しましたが、その話をお願いします。

歌舞伎町のような街に、ああいった建築を作るという面白さはありません。周辺の木造建築ともある意味では似合っていると思うんですよ。ただ、既成の街並みのなかに特殊なものを入れるという発想ではありません。まず、周りの環境を考えながらマスタープランを作るのです。環境に対するしっかりとした考えをもつべきだというのがロジャースのス



ダンスといえます。

**ウォーナーさんが東工大生だった頃のことを聞かせてください。**

東工大にいた頃は、日本の近代建築に夢中で、よく見に行きましたよ。新建築の地図をコピーしたりして、時間に余裕がありましたから、後は日本語の勉強とかね。日本語学校に行ったことはありません。独学です。

**学生時代、どのようにして建築を学びましたか。**

普通に本を読んだり、授業にもちゃんとでていましたよ。バイトをいろいろなところでしたので、近代的な日本の事務所での経験はできましたね。建築を見る際、むやみに時間をかけても無駄で、その作り方・考え方とかは実際に経験しないとわからないと思うんです。

**ロンドンの学生と東工大生の違いは？**

みんなまじめ。共通してますね。

**1日のタイムスケジュールを教えてください。**

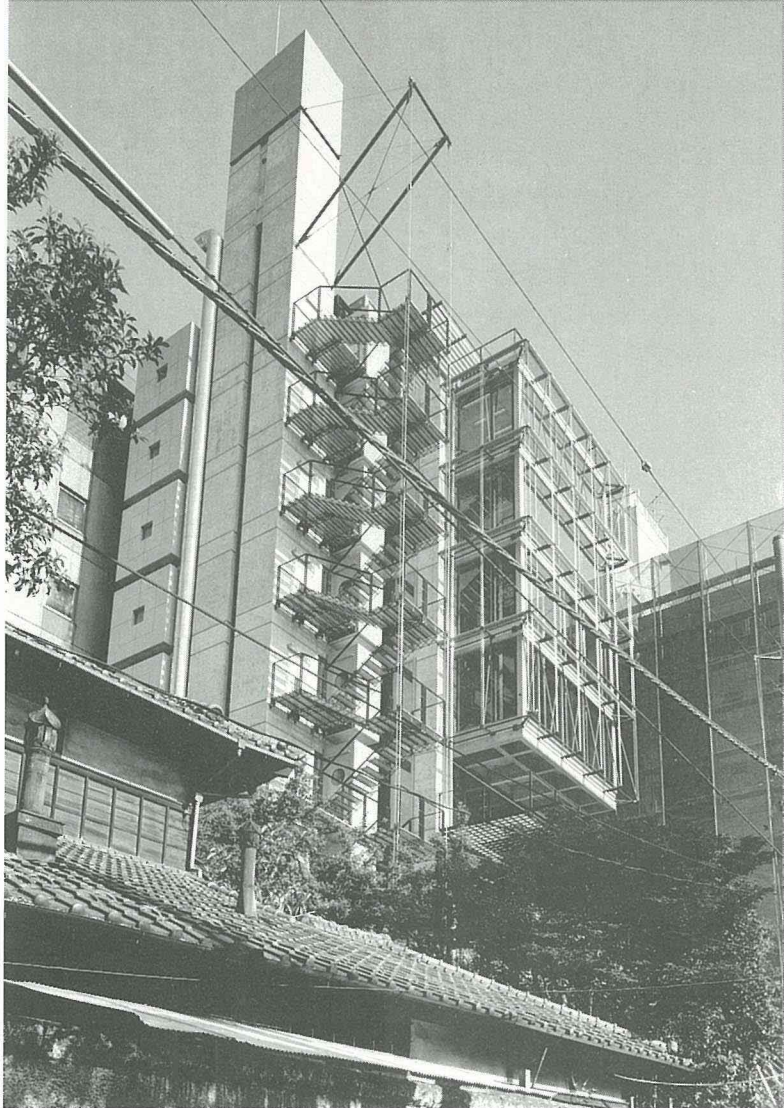
いつもだいたい7時頃おきます。出社するのは9時30分。一応、9時30分から6時30分までを規則時間として守ってもらっています。所員は8時頃までいるようですが、そして土・日は完全に休みで働かない、有給休暇もたっぷりとってもらおうという方針です。ただ、週3回ぐらいは接待が入ったりして帰宅は11時頃になります。付き合いは大切ですからね。イギリスでもこういうことはありませんよ。徹夜で仕事なんてことはまずありません。私は日本の事務所です。そういう経験をしましたが、そのお

げで人生が豊かになったとはいえません。人は、仕事をするために生きているわけではない、逆なんです。人生を豊かにするために仕事をする、お金も必要だから。そのとき、自分の好きな仕事につけるといいと思います。私の場合は、大好きな建築やインテリアの仕事につけて幸せですね。

**今の学生に何かアドバイスをお願いします。**

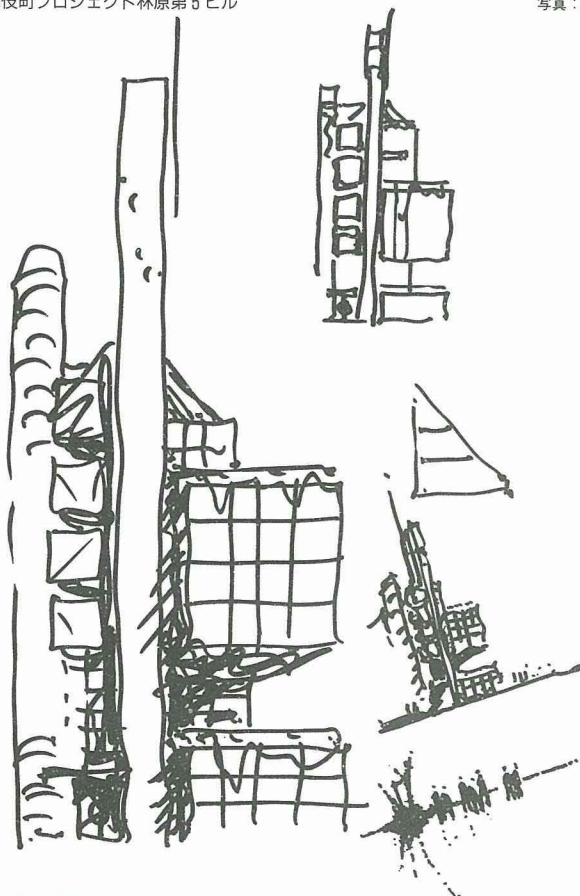
これはリチャード・ロジャースの意見でもあると思うんですが、現在は非常におもしろい時代だといえるでしょう。エコロジーとかエネルギーについて考えるべきことがたくさんありますから。建築によりエコロジカルな視点を取り入れつつ、技術と環境との調和をはかっていくことが大切だと思います。がんばってください。

ウォーナーさんは、所員の方々からは「Benさん」と呼ばれ慕われている様子。今回、建築にまつわるBenさんのお話からも、十分に「異文化」を感じることができたが、「大切なのは、自分の時間、家族と一緒にいる時間ですね」という言葉をライブで聞くと、今さらながら新鮮な響きを感じる。日本人は働きすぎだという批判を耳にするのが日常となっているが、あくまで間接的なもので、直接こういう意見を耳にする機会はほとんどない。この一言こそ、今回最も印象に残る「異文化」であったといえよう。



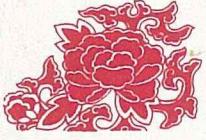
▲歌舞伎町プロジェクト林原第5ビル

写真：新建築提供



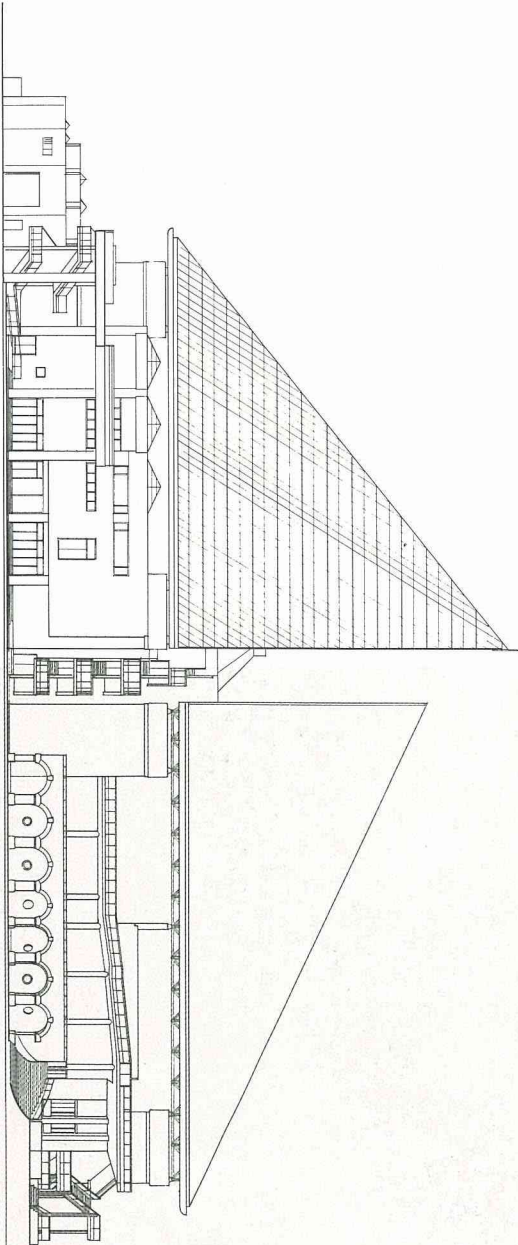
**インタビューアー**

江湖猛敏 Taketoshi Kouko (修士1年)  
 小島督弘 Tokuhiko Kojima (修士1年)  
 松枝 碧 Midori Matsueda (研究生)  
 山口尚之 Naoyuki Yamaguchi (研究生)

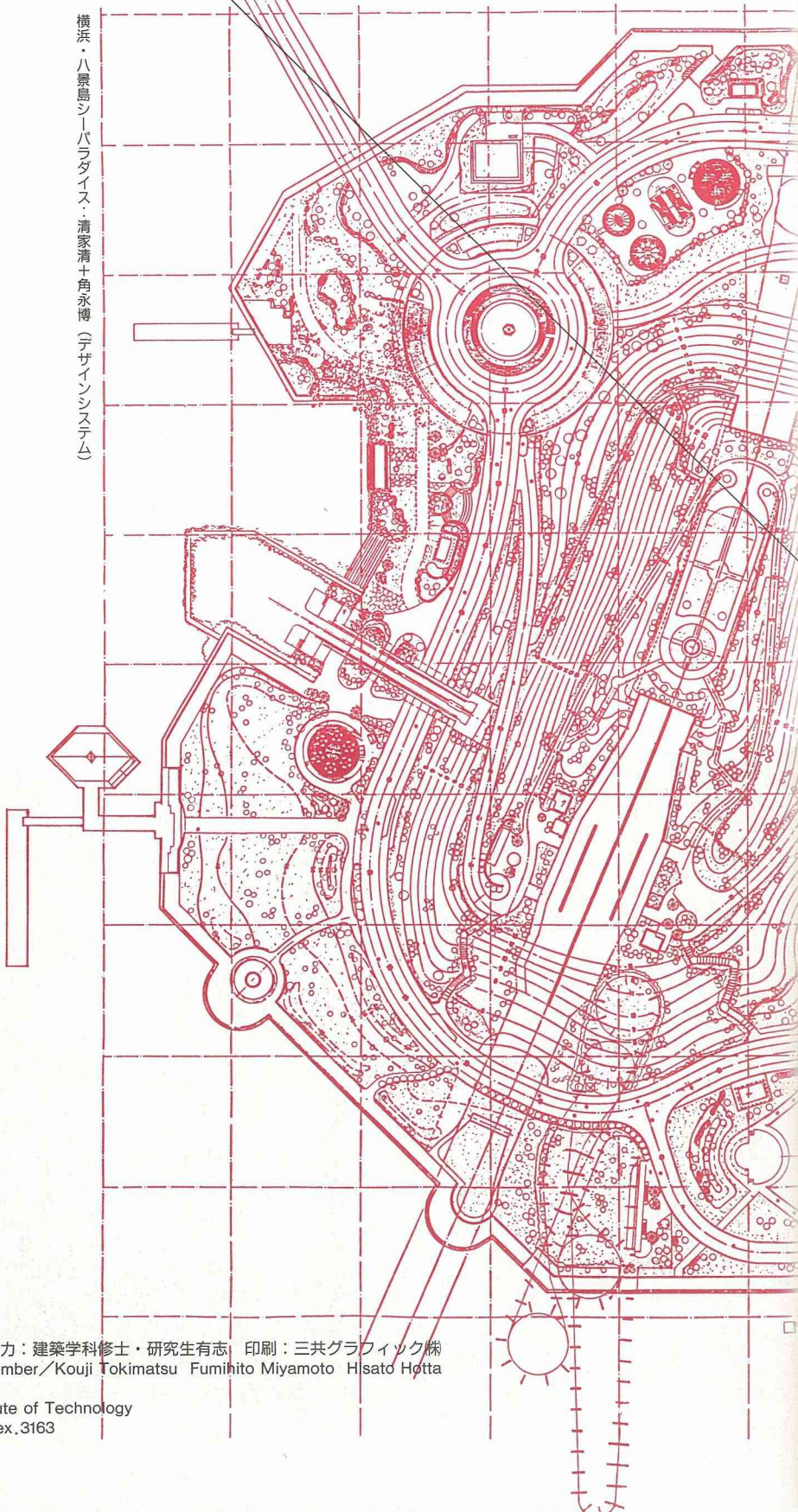


Ka No.7 1994  
 design journal of  
 the department of architecture  
 and building engineering  
 Tokyo Institute of Technology  
 published by TIT society  
 of architectural design education

編集：東京工業大学工学部建築学科 華編集委員会  
 委員長／仙田満 委員／時松孝次 宮本文人 堀田久人  
 事務局／佐久間 治  
 発行：TIT建築設計教育研究会 会長／林昌二  
 定価：800円



横浜・八景島シーパラダイス・清家清十角永博 (デザインシステム)



編集協力：(有)松井編集室 翻訳：デビット・スチュアート 取材協力：建築学科修士・研究生有志 印刷：三共グラフィック株  
 Edition: "Ka" Editorial Committee, chairman/Mitsuru Senda member/Kouji Tokimatsu Fumihito Miyamoto Hisato Hotta  
 secretariat/Osamu Sakuma translation/David Stewart  
 Department of Architecture and Building Engineering Tokyo Institute of Technology  
 2-12-1 O-okayama Meguro-ku Tokyo 〒152 phone 03-3726-1111 ex.3163